ARCLE®
Action Research Center for Language Education

2014年 上智大学・ベネッセ英語教育
シンポジウム報告書

SYMPOSIUM REPORT

子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは？

―「中高生の英語学習に関する実態調査2014」から考える課題と指導実践のあり方―

2014年12月 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム

ベネッセ教育総合研究所
ARCLE/アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です　http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは?

ー「中高生の英語学習に関する実態調査2014」から考える課題と指導実践のあり方ー

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム

●文部科学省後援●

日時 2014年**12月7日**日
10:00〜17:00

プログラム

10:00〜10:30 **第1部　講演:中高の英語学習を通して子どもたちに身につけさせたい英語力とは?**

登壇者　**吉田　研作**（上智大学）

10:30〜12:00 **第2部　調査報告:「中高生の英語学習に関する実態調査2014」＊（ベネッセ教育総合研究所）から見える中高生の英語学習の実態とは?**

登壇者・進行　**酒井　英樹**（信州大学）
コメント　**吉田　研作**（上智大学）　**根岸　雅史**（東京外国語大学）

12:00〜13:15 休憩

13:15〜14:35 **第3部　指導実践:調査データから実践知を得る　〜研究者＆現場の視点から〜**

進行　**加藤　由美子**（ベネッセ教育総合研究所）

Part I: 子どもたちのつまずきから考える指導への提案
登壇者　**田中　茂範**（慶應義塾大学）　**根岸　雅史**（東京外国語大学）

Part II: 授業の実態から考える「話す・書く」の指導実践
登壇者　**加藤　京子**（東洋大学附属姫路中学校・高等学校/前三木市立緑が丘中学校）
布村　奈緒子（東京都立両国高等学校・附属中学校）

14:35〜15:35 **第4部　研究発表:授業改善への最初のステップとは　〜「教員聞き取り調査」より＊〜**

進行　**福本　優美子**（ベネッセ教育総合研究所）
登壇者　**高木　亜希子**（青山学院大学）　**工藤　洋路**（駒沢女子大学）
重松　靖（東京都国分寺市立第二中学校/東京都中学校英語教育研究会会長）

15:35〜15:55 休憩

15:55〜17:00 **第5部　自由討議:子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは?**

進行　**吉田　研作**（上智大学）
登壇者　**ARCLE研究理事・研究員:**
アレン玉井　光江（青山学院大学）　**金森　強**（関東学院大学）　**田中　茂範**（慶應義塾大学）
長沼　君主（東海大学）　**根岸　雅史**（東京外国語大学）　**吉田　研作**（上智大学）

＊「中高生の英語学習に関する実態調査2014」及び「教員聞き取り調査」は、ベネッセ教育総合研究所が運営する以下の研究会で企画・調査・分析しています。
中高の英語学習研究会　**根岸　雅史**（東京外国語大学）　**酒井　英樹**（信州大学）　**高木　亜希子**（青山学院大学）
工藤　洋路（駒沢女子大学）　**重松　靖**（東京都国分寺市立第二中学校/東京都中学校英語教育研究会会長）
加藤　由美子（ベネッセ教育総合研究所）　**福本　優美子**（ベネッセ教育総合研究所）

上智大学国際言語情報研究所・上智大学大学院言語学専攻・ARCLE・ベネッセ教育総合研究所　共催

SOLIFIC
上智大学国際言語情報研究所
http://pweb.sophia.ac.jp/linstic/

ARCLE®
ARCLE
http://www.arcle.jp/

ベネッセ教育総合研究所
ベネッセ教育総合研究所
http://berd.benesse.jp/

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム 2014 年報告

子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは？

ー「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」から考える課題と指導実践のあり方ー

はじめに

上智大学と ARCLE（ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会）は、2014 年 12 月 7 日、上智大学にて「上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム 2014」を開催しました。

毎年、日本の英語教育の重要課題をテーマに討議しており、８回目[※1]となる今回は、テーマを「子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは？ ー『中高生の英語学習に関する実態調査 2014』から考える課題と指導実践のあり方ー」と設定しました。英語指導に関わる中学校・高校の先生方を中心に、研究者、教育行政関係、教師志望の学生など 240 名を超す皆様にお越しいただき、大変な盛会となりました。

今回は「子どもたちが、入試などを乗り越えた先の将来も見据え、英語で意味あるコミュニケーションをとれる能力を向上させ、自ら学び続けることができるようにするためには、何をするべきか」という課題認識のもと、ベネッセ教育総合研究所実施の「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」や「教員聞き取り調査」で得られたデータ、研究者の知や現場の実践知などをつなげて、多様な視点から課題解決の方策を議論しました。シンポジウムの最後には、教員、研究者、学生、教育行政関係者、民間事業者などそれぞれの立場から、自らの教育観や指導などを振り返り、気付きや今後の行動目標を記入し、参加者で共有しました。

シンポジウムの内容が少しでもお役に立つことを願い、報告書を刊行いたしました。

今後も ARCLE は、教育現場での具体的な課題を見つけ、その解決のためにアクション・リサーチを推進し、日本の英語教育の改善のために研究を進めていく所存です。

上智大学　言語教育研究センター長・教授 /ARCLE 代表
吉田　研作

※1　これまでのシンポジウムの詳細は、http://www.arcle.jp/about/ の「活動実績」からご覧ください。

第 1 部　講演：中高の英語学習を通して子どもたちに身につけさせたい英語力とは？

吉田　研作（上智大学）

平成 25 年 12 月に、文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表された。その計画には、小学校５年生からの英語教科化とともに、中学校でも英語の授業を英語で行うことを原則とすることが記述されている。これは、すでに小学校で英語に慣れ親しんできている子どもたちに、中学校に入ったとたん、いきなり日本語で英文法を教えるのではなく、知識を教えるよりも英語を使うことを中心としている小学校での授業法を引き継いでいくという発想で授業を行うことを意味している。将来、小学校で英語が教科化された際、教える内容については中１から小５へ前倒しするのに対し、教え方については、逆に小学校から中学校へ、いわば「後ろ倒し」する（引き継ぐ）発想ともいえる。

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

小学校のやり方を中学校でも引き継ぐのは、「小学校の英語は楽しかった」という子どもは 70 ～ 80% 近くいるので、その小学校のやり方を中学校でもやっていこうという捉え方ができる。

現在の学習指導要領の中でも高等学校の英語は原則英語だが、実践できているのは 20 数パーセント程度という少ない割合。入試のあり方が影響を与えていると考えられる。大学入試のあり方を根本から変える必要があり、現在、大学入試、そして場合によっては、高校入試でも外部試験の導入、４技能を測れる受験体制が検討されている。

計画が目指す英語力の目標は、中学校卒業段階で英検３級、高校卒業段階で英検準２級を達成する生徒の割合を現状の約 30%から 50%以上にすることである。小学校からの英語教育、中学校でも英語の授業を英語で行うことによる底上げ効果を期待している。

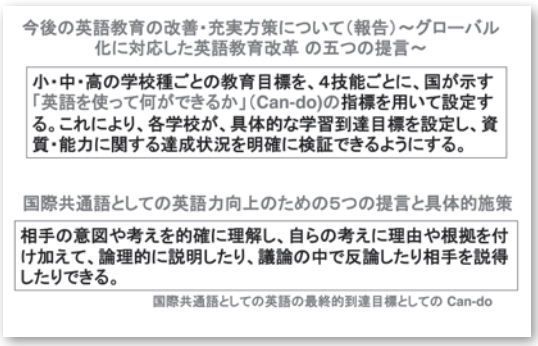
また、伸びが期待される生徒には、中学校卒業段階で準２級（CEFR A2）、高校卒業段階で準１級（CEFR B2）を達成できる生徒が増えることを望んでいる。CEFR でいう A2 ～ B2 レベルの生徒を増やすことが、大きな目標と考えられる。

実際にどのような英語教育を行えばよいのだろうか？

学習指導要領には、「標準的な英語を教える」と書かれている。そこには、アメリカ英語がネイティブ並みにできるような生徒をつくらなければいけないという発想があった。発音をたくさん練習し、文法的な表現、かっこいい慣用表現をたくさん覚え、できるだけネイティブらしい英語を身につけることが目標だった。アメリカでは、移民の人が生活・教育・仕事のあらゆる場面で母語並みに使える英語の力を育てようとするが、日本の環境はそうではない。１日数時間の英語学習では、どこまでいってもネイティブのようにはなれない現実がある。むしろ、EU 諸国のように、複言語主義（Plurilingualism）的な考え方のほうが、日本の英語教育には向いているのではないか。この場合、必ずしもネイティブ並みに発音ができる必要はなく、まず相手とコミュニケーションがとれることが大事であり、自分の言葉を使って、相手を説得できるようなコミュニケーション能力を身につけていこうと考えることが重要だと思う。

EU では３言語主義と言われ、母語はしっかり身につけた上で、多くの国の人とコミュニケーションするために必要な共通語である英語を学習し、３つ目の言語として、自分が勉強または仕事をしたい国の言葉を学習する。Plurilingualism の考え方は、必ずしもネイティブ並みになる必要はない。相手に通じるように、コミュニケーションができることが大事。発音に母語のなまりがあるかもしれないが、自分の言葉を使って、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加え、論理的に説明、議論、相手を説得できる能力、すなわち「国際共通語としての英語」でコミュニケーションできる力（＝英語を使う力）を備えることが大事となる。

では「国際共通語の英語って誰のもの？」と言ったら、世界中で国際共通語として使っている人、みんなのものである。国際共通語としての英語は、世界中で共通に使われているコミュニケーションの道具としての英語だという発想でいいと思うし、それを日本の英語教育の中にきちんと根付かせていくということが大事だと考えている。



学習目標については、ネイティブの英語を基準とするのではなく、『英語を使って何ができるか』（Can-do）という指標を基準にすべきである。Can-

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

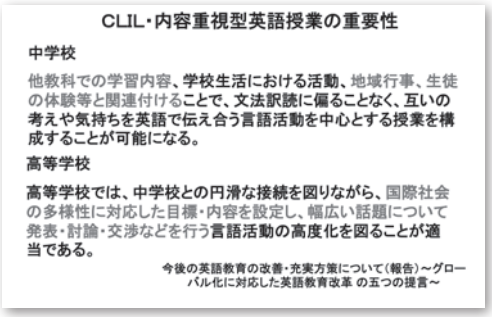
do を用いることで、具体的な学習到達目標を設定でき、必須能力に関する達成状況を明確に検証できるようになる。

現在、日本の英語授業で一般的に行われていることは、「これ来週までに暗記しておいで。小テストをやるよ」「クイズやるよ」という、いわゆる暗記作業（remembering）。それから、黒板に文章を書いて「この文の意味は何ですか」という意味や理解度の確認（understanding, comprehension）。そして、「では、今までに習った構文と単語を使って、この文章を読んで訳そう」という学習した構文や単語を応用した英文和訳（applying）などが中心。これらすべてが受動的な能力であり、自らの考えを発するところはどこにもない。すべて与えられたものをベースに、理解できているかを試すものなので、高次の認知能力を育てるためには、生徒自らが自分の考えを発するなど能動的に関わる必要がある。

教科書の内容理解を問う問題はあるが、「著者は、なぜこのようなことを書いたのだろう」「本当に言いたいことは何だろう」とディスカッションする先生は、少ない。「みんなはどう思う？ 賛成？ 反対？」と意見を言う evaluation や「今やったこの話題についていろんな議論をしたね、この人はこんなことを言ったね。じゃあ自分の考えを述べなさい」とか「自分の考えを来週までに作文しておいで」という creation も少ない。つまり文章が書かれた理由・内容の分析（analysis）、評価（evaluation）、作文・レポート（creation）といった能動的な高次の認知的活動が、授業でほとんど行われていない。論理的に自分の考えていることを相手に伝えることで、相手が言っていることを理解し、反論、議論できるが、それをやらないまま、言語の構造学習を続けても、この能力は身につかない。このような状況では、Can-do をいくら設定しても達成できない。なぜなら、Can-do を達成するには、生徒自らが自分の考えを発するよう能動的に関わる必要があるからだ。このことを実現するために、文部科学省は、中学校・高校の学習指導要領を Can-do の形で書き換える作業を行った。１つのモデルであり、これがすべてではないが、これをきっかけとして、Can-do を目標とする英語教育を目指していければと思う。

また、日本の英語教育では、ある表現形態について１つの答えしか教えない傾向があるが、たとえ Can-do は１つであっても、表現形態はいくらでもあるので、それにきちんと対応できなくてはいけない。例えば、誕生日プレゼントをもらったことに対してお礼を言う場面。‘Thank you.’ 以外に、‘That's wonderful.’‘It's beautiful.’‘I always wanted this.’ とだんだん広がる。間接的だけれども、感謝の表現はたくさんある。また、天気がすごく良かったので動物園に行くことを提案する場合、‘Let's go to the zoo.’ とか、‘Why don't we go to the zoo? ’‘Would you like to go to the zoo? ’ などの表現がある。つまり、言語形式中心の教育から、ファンクション中心に変えていく必要がある。

学習内容も重要なポイント。CLIL（Content and Language Integrated Learning :内容重視型英語授業）である。英語だからといって英語だけの問題ではなくて、例えば理科や社会の問題を英語の授業で扱う、学校生活における活動、地域行事、生徒の体験などと関連付けるなどして、「英語を使って何をやるの？」まで発展させてほしい。高等学校においても国際社会の多様性に対応した内容設定、さまざまな教科を交えて幅広く授業を行うことで、すべてが CLIL になっていく。内容と言語を合わせた教育につながっていくと私は考えている。


CLIL・内容重視型英語授業の重要性

中学校

他教科での学習内容、学校生活における活動、地域行事、生徒の体験等と関連付けることで、文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を中心とする授業を構成することが可能になる。

高等学校

高等学校では、中学校との円滑な接続を図りながら、国際社会の多様性に対応した目標・内容を設定し、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動の高度化を図ることが適当である。

今後の英語教育の改善・充実方策について（報告）～グローバル化に対応した英語教育改革 の五つの提言～

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

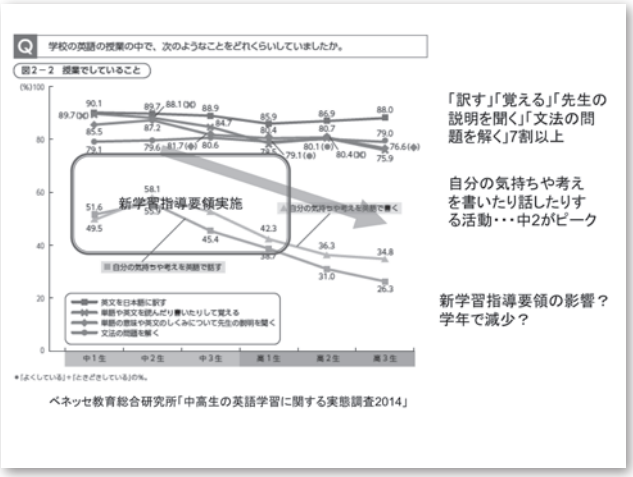
第２部　調査報告：
「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」（ベネッセ教育総合研究所）から見える中高生の英語学習の実態とは？

発表＆コーディネーター　酒井　英樹（信州大学）
コメンテーター　吉田　研作（上智大学）
根岸　雅史（東京外国語大学）

はじめに

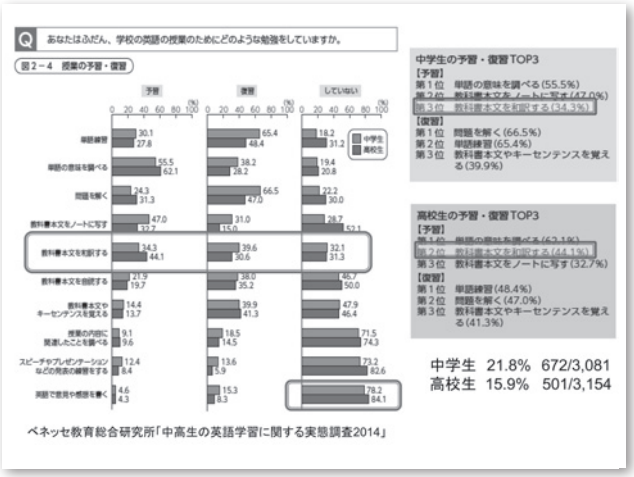
「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」は、2008 年、2009 年に行われた「中学校英語に関する基本調査」を基に、時代変化による変容を探り、また幅広い学習者像を知るために、中学校１年生から高校３年生までの 6,000 人超を対象にした大規模調査として実施したものである。この大規模調査の内容を共有し、①子どもたちの学習実態、②英語学習のつまずき、③英語に対する意識、英語を勉強する上で大切なことの３テーマについて自由討議を行った。

①　子どもたちの学習実態



「授業でしていること」：伝統的な学習を７割以上が経験していることが分かる。「自分の気持ちや考えを英語で書いたり、話したりする活動」のピークは中学校２年生で、学年が上がるにつれ、徐々に減っていく。

「授業の予習・復習」：「教科書本文を和訳する」という回答が上位。「英語で意見や感想を書く」は、「していない」がかなり多い。



© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

会場意見①　中学校では、言語の使用場面などを踏まえ、会話ができるようになる授業を行っている。高等学校では、授業中に問題演習的なことをしなくなった半面、家庭でその課題をさせている。自分の県では、英語を日本語に訳す割合はこの調査結果より少ない感じがする。一方、英語で話したり書いたりする活動は、本県においても少ないように思えるのでこの調査結果に納得した。

会場意見②　実体験だが、予習の段階で教科書の英文をすべて日本語に訳してから学校に行く学習をしていた。目指していた大学の入試には自分の気持ちを述べる英作文があったので、高校３年で意識改革し、その英作文に対応したアクティブな英語力をつける学習をした。

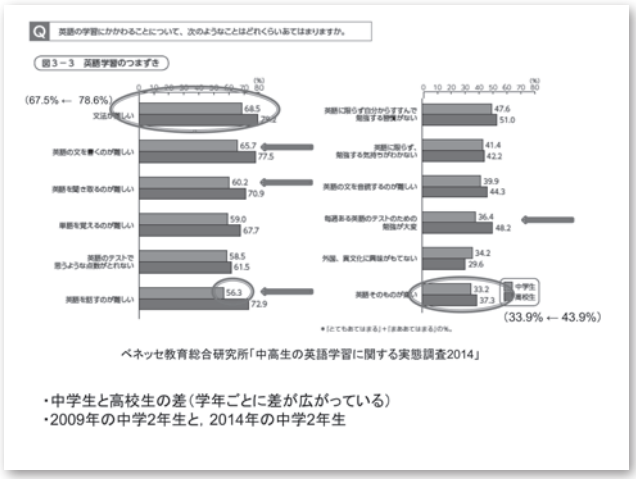
根岸先生コメント　今回の調査は生徒に聞いているので、先生は「こういう授業をやっていないはずだ」と言っても、生徒にはそう見えているところが見えている。生徒の認識として、「訳す」「覚える」「先生の説明を聞く」「文法の問題を解く」の４点セットを中１から高３まで授業で行っていると見えていることは興味深い。量的な変化は起きていそうだが、今回の調査では「授業中にどの程度やっているか」という量的なことまでは問えていない。

上級生になるほど自己表現に関する活動が減っていくのは、なぜなのか。カリキュラムのあり方も含めて検討する必要がある。生徒も先生も、高校３年で受験に近くなって、受験では自己表現が求められていないという認識を持っているとすれば、大学入試の問題も絡んでくるかもしれない。

吉田先生コメント　データは注意して解釈しなければいけないが、素直に見れば、授業で実施している４点セットは予習復習でも行っている。反転学習の考え方からすれば、授業でオーラルを行っており、その予習、復習であればいいのだが、オーラル面に関しては、学年ごとに少しずつ減っている。自己表現に関する活動には重きが置かれていないようだ。

予習・復習で、内容に関連して調べることをしないのは、読んだ内容についてみんなで一生懸命考える活動を行っていないということ。オーラルの練習や書く練習は、ほとんどされておらず、多くの時間が、言語の構造、フォームの勉強に費やされているのだと思う。これが Can-do 的なものに移行していくことでどう変化するか。今後を見ていきたい。

②　英語学習のつまずき



「文法が難しい」「英語の文を書くのが難しい」「英語を聞き取るのが難しい」と、高校生のほうが難しさをより多く実感。「文法が難しい」という中学校２年生は、2009年のデータでは 78.6％であったものが、今回は 67.5％に減っている。

会場意見③　「文法が難しい」には、英語を話そうとするときに表現ができなくて文法が分からないと考えているのか、テストで能力を測られているときに文法が分からないと思っているのか、２つの側面

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

があるのではないか。高校生の 72.9%が「話すのが難しい」と答えているのは、普段練習していないがイベント的に話すので難しいのか、普段から練習しているが難しいのか、この結果からは判断できない。「毎週ある英語のテストのための勉強が大変」は、「文法が難しい」という回答と兼ね合いがあるのではないか。

会場意見④　予習復習のデータと関連して、文法説明や和訳の活動が多いにもかかわらず「文法が難しい」「単語を覚えるのが難しい」と考えている生徒が多い。これは、教師が行う文法の指導法によるか、または、子どもたちが受動的に勉強しているために難しさを覚えているのだろう。私は、教師の一方的な解説が多いという感覚を持っている。文法を活用してコミュニケーションを取るなど、文法を生きた知識として活用する場面が少ない結果ではないか。

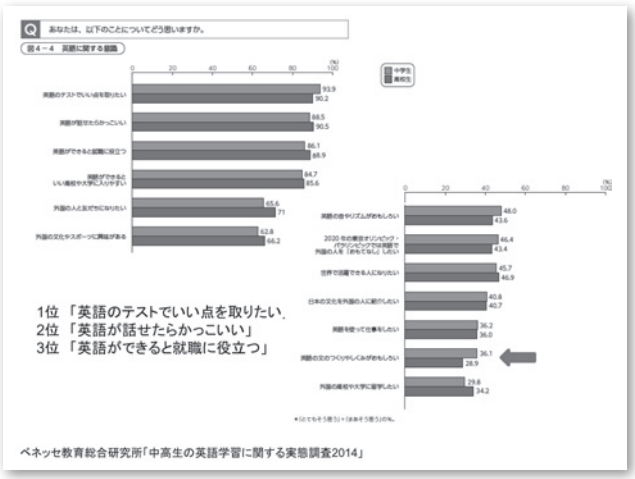
根岸先生コメント　半分以上の子どもたちが難しいと言っている項目を見た場合、実際に学習していて難しいのか、学校であまりやっていないために難しいと感じるかによって異なり、一口に難しいと言っても種類が違う。

文法が難しいと回答する背景には、日本人学習者が英語の文法を学ぶこと自体の難しさと、指導法を原因とする難しさがあると思うが、高校の英語文法の説明は中学校のものに比べると、ほとんど説明になっていないことが多い。筋立てて理屈が通るような説明だといいが、ただ単に文法用語を伝えただけで、文を言って「これは仮定法過去だからね」だけでは生徒は理解できない。

吉田先生コメント　オーラルの授業が減っていることと相関しているが、高校生が「聞き取り」や「話す」ことを難しいと感じるのは、中学校で行っていたことを段々としなくなるからだろう。「文法が難しい」のは、コミュニケーション活動の中に文法が埋め込まれておらず、抽出された文法だけの学習になっているから。文脈を取ってしまっては分からなくなるのも当然だ。

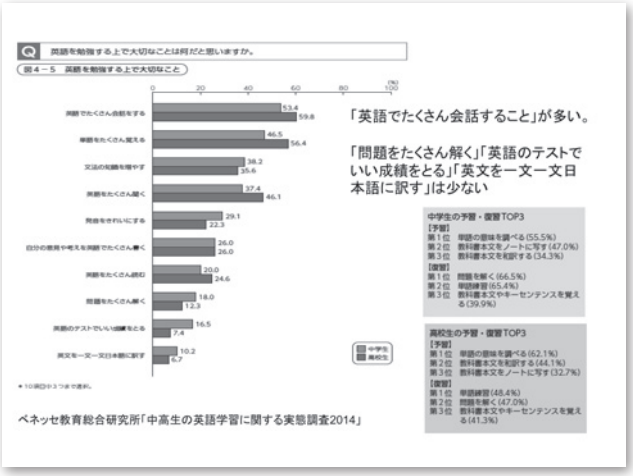
「英語の文を書くのが難しい」のは、純粋に英語を書くことなのか、和文英訳なのか、どちらなのかで解釈が変わってくる。純粋に書くことが苦手だとしたら、授業で書かせていないからなのでは。和文英訳が難しいのは、文法がこれだけ苦手なのだから、当然のことだろう。

③　英語に関する意識、英語を勉強する上で大切なこと



英語に関する意識についての質問には、1位「英語のテストでいい点を取りたい」2位「英語が話せたらかっこいい」3位「英語ができると就職に役立つ」。中学生が「英語の文のつくりやしくみがおもしろい」と回答したのは、小学校で英語に触れ、仕組みみたいなものにも目が行き始めた、認知発達的な要素もあると考えられる。

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.



英語を学習する上で「英語でたくさん会話をする」ことを重要だと思い、「問題をたくさん解く」「英語のテストでいい成績をとる」「英文を一文一文日本語に訳す」はあまり重要性を感じていない。

会場意見⑤　目先の利益につながることで、「英語のテストでいい点を取りたい」「英語ができるといい高校や大学に入りやすい」「英語ができると就職に役立つ」といった回答が中高問わずとても高い数値を表している。一方で、「英語を使って仕事をしたい」のように海外に出て英語を使って活動していこうと将来を見た意識は低いと感じた。留学や海外での就職を希望する日本人が減っていることも、この回答からうかがえるのではないか。

会場意見⑥　「英語のテストでいい点を取りたい」という項目を中高生が第一目標としているのは疑問。テストでいい点を取りたいというのを目標にしてしまうとその先を見据えることができないのでは？「英語ができるといい高校や大学に入りやすい」も、テストや入試が終わった後、学習などのモチベーションは続くのだろうか。「英語ができると就職に役立つ」がもっと上位に行かなければならないと思う。

会場意見⑦　生徒たちは内向き傾向で、外に出て行こうという気概がそがれていると感じる。実利ばかりに目がいって内容的な部分に興味関心を持つパーセンテージがとても低くなっているのは悲しいと思ったが、大学の先生は「このぐらいいることが逆に救われる」と話された。中学生のほうが意識的には苦手意識は高まっていても、興味、関心という部分の意識が高まっているのはいい点だと捉えた。

根岸先生コメント「英語はどうですか」と聞いた場合、英語という教科はどうかという話と、英語という言葉はどうかという２つの意味があって、その認識がそれぞれの回答に反映している。教科として見た場合、英語ほど実際の社会で使う場面が関わる教科はない。大切なことの中に「英語でたくさん会話をする」が入っているのは、実際の言葉としてどうだという生徒の認識の表れだろう。現在は、「英語のテストでいい点を取りたい」と「英語でたくさん会話をする」が別のことのように見えているようだが、ここがつながれば良いと思う。

吉田先生コメント「英語でたくさん会話をする」のが大事だと回答する割合が高くて驚いた。英語を使いたいと思う気持ちがよく表れている。特に高校生は、オーラルコミュニケーションの授業を希望している。オーラルの中で、文法を使って表現できるということが分かれば、文法とオーラルが統合できてくる印象を受けた。

英語を知っているといい仕事に就ける、役に立つと思いながら、自分はあまり英語を使った仕事はしたくないと思っている。これは自分の英語に自信がないからで、教師はこれをどう捉えるかが大事だろう。私たちは、単に夢を与えるだけでなく、夢を実現するための教育とは何か、しっかり考える必要がある。

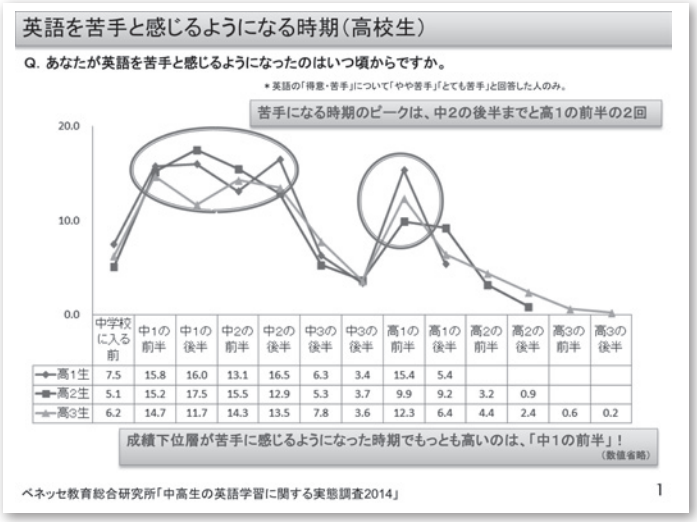
ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査　2014」
http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356

© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

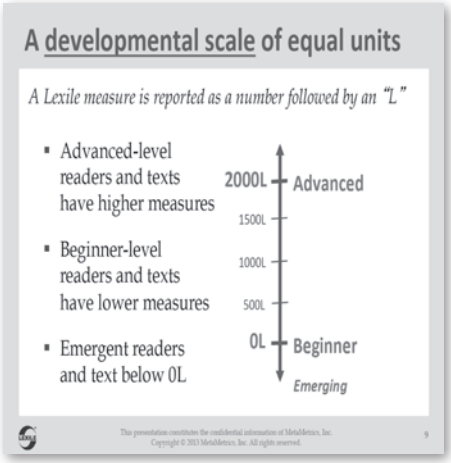
第３部　指導実践：
調査データから実践知を得る　～研究者＆現場の視点から～
Part Ⅰ　子どもたちのつまずきから考える指導への提案①

根岸　雅史（東京外国語大学）

「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」から、生徒が英語を苦手と感じる時期は、中２の後半までと高１の前半の２回のピークがあることが分かる。これまで中学校の時期に、英語が苦手になることは分かっていたが、高校に入った直後に苦手と感じる生徒が急増することは意外だった。この原因について、Lexile Measure という指標を用いて考察した。



	中学校に入る前	中1の前半	中1の後半	中2の前半	中2の後半	中3の後半	中3の後半	高1の前半	高1の後半	高2の前半	高2の後半	高3の前半	高3の後半
高1生	7.5	15.8	16.0	13.1	16.5	6.3	3.4	15.4	5.4				
高2生	5.1	15.2	17.5	15.5	12.9	5.3	3.7	9.9	9.2	3.2	0.9		
高3生	6.2	14.7	11.7	14.3	13.5	7.8	3.6	12.3	6.4	4.4	2.4	0.6	0.2



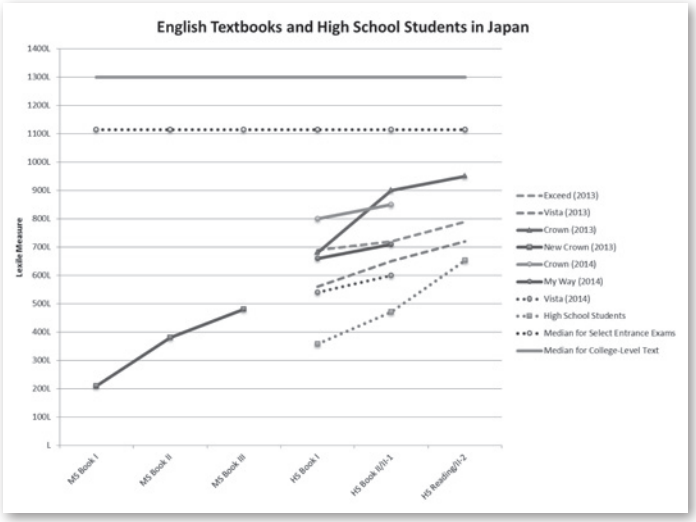
Lexile Measure は、テキストの難易度を表すリーダビリティと本質的に同じだが、この指数の特徴は読み手の「読解力」を同一尺度上に示していること。Lexile Measure は、自分の読解力と同じレベルのテキストであれば、およそ75％の理解度を持って読むことができるとされている。アメリカのアマゾンのサイトには、本の難易度を示す Lexile Measure が表示されているので、例えば 880L（Lexile）の難易度のハリー・ポッターを 850L の読み手が読んだ場合、フラストレーションなく読めることが分かる。マイナス 100L ～プラス 50L ぐらいが大体適度なレベルとされている。

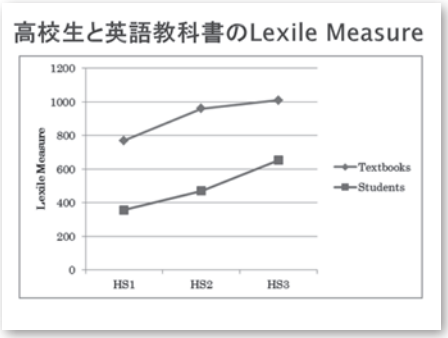
今回は、教科書内にある本文、リーディングテキストの難易度が、学習者にとって適切なのかを調べた。

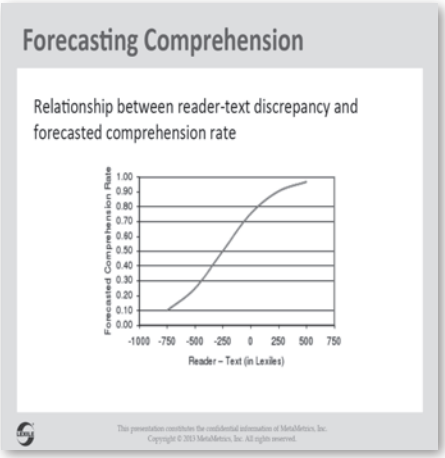
中学３年の教科書では 500L であったものが、高校１年生の時点では、旧課程の Exceed、Vista、Crown のどの教科書でも、100L 近く難易度が跳ね上がっている。１年分くらい先に進んだようなギャップができている。新課程の Crown に至っては 800L となり、高校入学時の平均が 500L なので、300L

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

も違う。この差は、中１の教科書と中３の教科書の差にも匹敵する。このギャップで子どもたちはつまずくと考えられる。







地方にある公立の中高一貫校の高校生の能力値をLexile Measureで測定した。模擬試験・GTEC for STUDENTS・英検などのさまざまなテストの受検結果から、日本における平均的な高校生だと判断してよいと思うが、高１の生徒が自力で読めるのは中２の教科書程度になる。生徒の能力値は、高１で約400Lあり、高２で約500L、高３で約600Lと伸びていくが、教科書のLexile Measureも上昇するので、教科書と能力値の差は常に400L程度できてしまう。いずれの学年も自力で読んだ場合、その理解度は30%程度しかないことを意味している。

また、教科書の新出単語は、啓林館：Element Ⅰ で各レッスン30～50語くらい、Element Ⅱで各レッスン40～60語ある。新出単語の割合は8%前後。新出単語の取り扱いになっていない未知語もあるらしく、そのトータルとして本文中に12%前後の未知語がある。辞書を引くべき単語がかなり多く、和訳は暗号解読的な作業になってしまうだろう。別の国立大学附属高校でも調べたところ、こちらは平均18/803 words=2.24%しか未知語はないので、生徒はフラストレーションなく教科書を読めていることが分かる（未知語が５%以下で「自力で読める」、未知語が３%以下で「フラストレーションなく読める」とされることが多い）。

生徒のつまずきは、テキストの難易度に起因すると考えられる。ほとんど自力で読めない教科書が使

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

われている現状があるので、採択教科書や採択のプリンシプルの変更、さらには、教科書づくり自体を変える必要があるのかもしれない。別の研究データから、生徒はテキストの難易度が上がってしまうと日本語に訳してしまう傾向が見えてきた。英語の授業を英語で行おうとしたときに、現在のような難易度のテキストを選択するにはかなりの無理があるかもしれない。英語でやるのであれば、ある程度生徒が理解可能なテキストをたくさん読ませるべきだと、私は考える。

Part Ⅰ　子どもたちのつまずきから考える指導への提案②

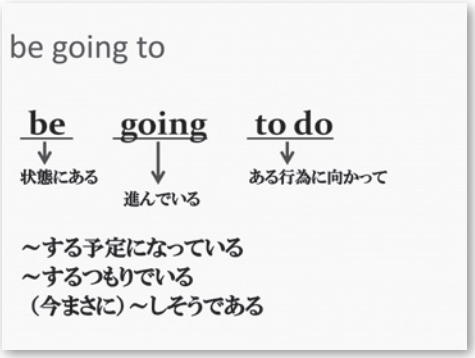
助動詞 will vs. be going to / can vs. be able to / must vs. have to

田中　茂範（慶應義塾大学）

英語教育で重要なのは、オーセンティックで、ミーニングフルで、パーソナルな活動を行うこと。今回は、will と be going to、can と be able to、must と have to の違いについて述べる。助動詞は表現力の要で、will、can、must のどれで表すかによって、言葉のパワーやインパクトが変わる。助動詞は、話し手の態度、モダリティとつながっている。

助動詞と関連表現（be going to, be able to など）を分けることには意味がある。形が違えば意味も違うので、will と be going to には、はっきりとした違いがある。明確な違いを教えないと、助動詞の can と、助動詞関連表現の be able to も同じとして扱ってしまう。助動詞では will can と言うことはできないが、助動詞関連表現では will be able to といった自由な組み合わせができる。

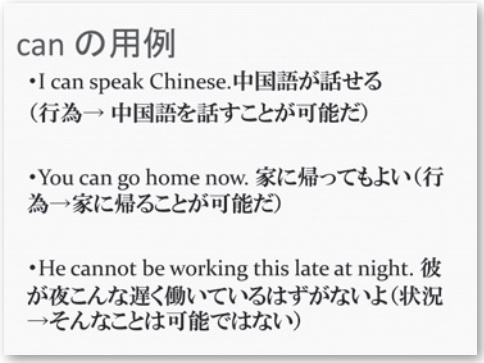
will は態度を表す。未来の表現だけでなく、話し手の現在の意志、推量を表すことがポイントで、例えば電話が鳴っていて「僕が取るよ」は、'I'll get it.' という言い方をする。一方で be going to は、going の働きが重要で、する予定である、今まさに何々しそうである、といった意味になる。したがって、赤ん坊がもう生まれそうなときには、'I'm going to have a baby soon.' であって、'I will have a baby soon.' とは言わない。



車が衝突しそうな現場を目撃した場合、'They're going to crash.' は、「危ない！ぶつかるぞ！もう避けられない」という感じだが、'They will crash.' では、この分だとぶつかるだろう、と少し余裕がある。

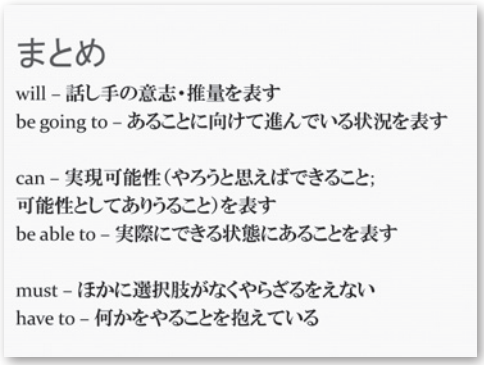
ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

このように英語学習には、その差が際立つような状況を示し、authentic なものを見つけさせることが重要だと考える。



can は、語源的には know から来ているので、行為の実現可能性を表す。やろうと思えばできる。'I was able to talk to her.' と言えば、実際に話すことができたが、'I could talk to her.' となれば、話そうと思えば話すことは可能だったけれども、話したかどうかは確かでない状態になる。つまり can は、しようと思えばできるという意味になる。

must は、強制で、それしか選択肢がないことを表す。I must は、これしかない、強い強制力を表す。一方の have to は、したくないけれどしなくてはならない程度の切迫感になる。have to と must とでは強度が違う。



will と be going to、can と be able to、must と have to の違いを明確にできるような、authentic で meaningful な example を示すことが、文法を分かりやすくすることにつながる。「状況をいかに示すか？」が重要である。どの言語でも文法のない言語は存在しない。文法力を付けていくことが重要だと考えている。これまでの英語教育は文法に力を入れてきたけれども、それは文法の知識をつけ、問題が解けるようになることが目標だった。文法を知識として持つことと、文法力があることとは全く意味が違う。文法力とは、状況に合った言葉を自由自在に紡ぎ出していく力である。文法力を鍛える文法は、まさに表現につながっていくということだ、と私は考える。

Part Ⅱ　授業の実態から考える「話す・書く」の指導実践①

加藤　京子（東洋大学附属姫路中学校・高等学校／前三木市立緑が丘中学校）

私は英語の授業を通して、子どもたちに、①人生を楽しんで生きようとする姿勢、②他者への関心、③自分の持っている資質を活かす力、④社会や世界へ興味を持ち自分とのつながりを考えること、⑤自立した学習者になること、を身につけてほしいと考えている。

生徒はいずれ社会資源を利用することになるので、教師は絶えずそちらにも目を向けた指導を心掛けなければいけない。中学校の３年間を通して、外国語の学び方のコツを身につけさせれば、将来スペイン語を習うことになっても、ポルトガル語を習うことになっても、同じ手法で学習が可能になると考える。

そのためにどのような授業を組み立てるか。基本は、生き生きとした音声表現があること。言語が使われている場所のイメージができないと、単に言葉の羅列を覚えるだけになるから。そして文法知識と文法力の違いみたいなものを学習しながら、生徒の「書く」力を伸ばしていきたいと思っている。「書く」というのは教師から自立した行為なので、書く力を伸ばしてやらないと子どもは自立していかない。

書く指導とは何かというと、書くことを怖がらせない指導になる。ベネッセの調査データの中で、中１

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

前期に英語が難しくなるという結果があったが、それは読めないのに書くことを強制されているためではないかと考えている。「書くのは楽しい。面白い」と生徒が言う指導を心掛けたい。

私の指導は、段階を追ってクリエイティブなライティングをさせていく。ただ書かせるだけではなく、それを1つのノートに残させている。クリエイティブがポイントで、中1からでも実行できる。I want だけでもクリエイティブにさせることは可能で、I want を使って「家で欲しいものを20個書こう」と言うだけでよい。子どもたちは書き尽くした後、'I want world peace.' と書いてくるからすごい。

クリエイティブなライティングは、ある文法事項や文章展開のパターンを条件にした「自由な」ライティングで、表現したくなるような課題を設定する。例えば好きな国を紹介しなさい、自分の憧れのスターとの対話文を考えなさいと指導する。表現すべき場面や文脈を理解させることが大事で、その場の人間関係を考えさせ、感情・感覚を理解して表現させる。文法や単語は、感情とくっついているので、その状況や使い方の説明を十分行い、なぜそう言いたいのか、なぜこう書いてあるのかを生徒に考えさせる。適切なモデル文さえ与えれば90%の生徒はライティングができる。文脈の中で、文法使用を示すのがポイントで、慣れてくるとモデル文を参考にしながら、言いたいことを自由に書くようになる。ただし、中学校の英語は英語力の根幹を成すので、書く内容を重視する場合と、文法指導を重視する場合のバランスを配慮した指導にする。

～クリエイティブなライティングの実践事例～

■練習（単純な書き換え、適語選択）……生徒にとって身近な人を用いた例文、後で生徒が使えそうな例文を用いる。例文には He/She をいきなり使うことを避け、誰を話題にしているかをはっきりさせる。

1　I　**play**　table tennis.

Mr. Ikawa　(　　)　tennis. 井川先生はテニスをする。

3　I　**drink**　coffee　every day

Ms. Soga　(　　)　*aojiru* juice every day.

曽我先生は毎日,青汁を飲む。

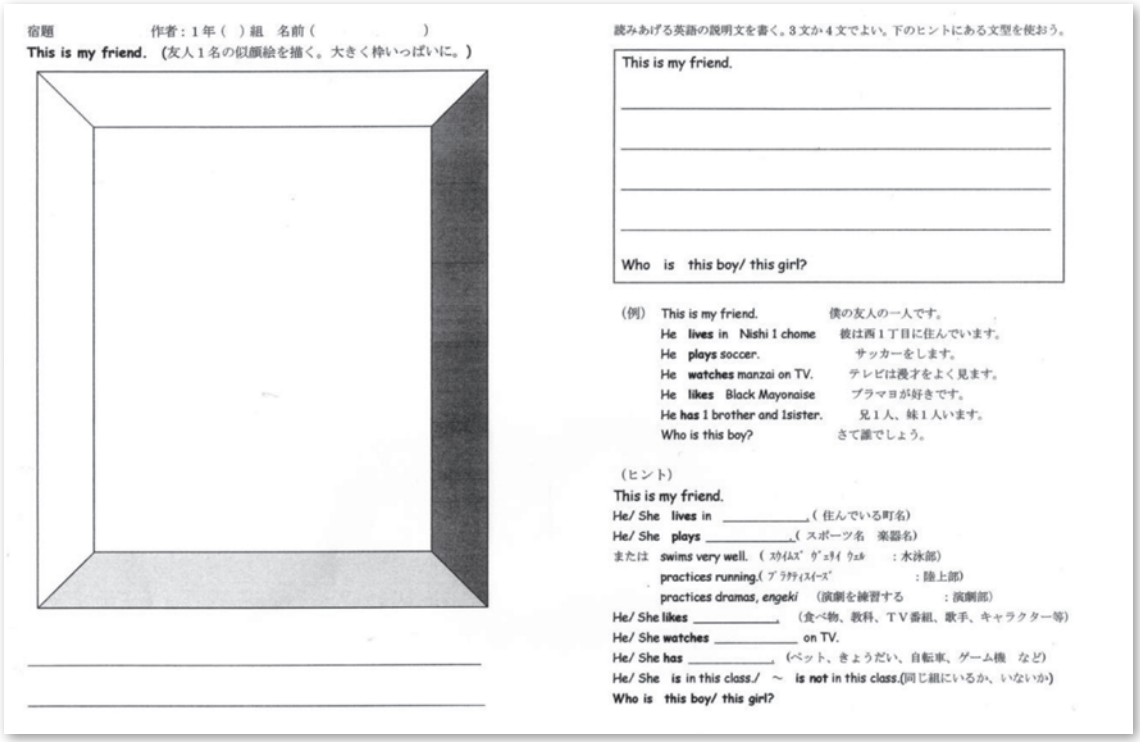
11　We have one more house in Hawaii.

It (　　) a big swimming pool.その家にはプールがある

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

■生徒による友達紹介クイズ……生徒は、紙を折り、絵を見せながら原稿を読み上げる。
暗記させると三単現のＳを飛ばしがち。あえて読ませる。

（このときは有名人クイズで導入）



宿題　　作者：1年（ ）組　名前（　　）

This is my friend.　(友人１名の似顔絵を描く。大きく枠いっぱいに。)

読みあげる英語の説明文を書く。３文か４文でよい。下のヒントにある文型を使おう。

This is my friend.

Who　is　this boy/ this girl?

(例)　This is my friend.　　僕の友人の一人です。
He　lives in　Nishi 1 chome　　彼は西１丁目に住んでいます。
He　plays soccer.　　サッカーをします。
He　watches manzai on TV.　　テレビは漫才をよく見ます。
He　likes　Black Mayonaise　　ブラマヨが好きです。
He has 1 brother and 1sister.　　兄１人、妹１人います。
Who is this boy?　　さて誰でしょう。

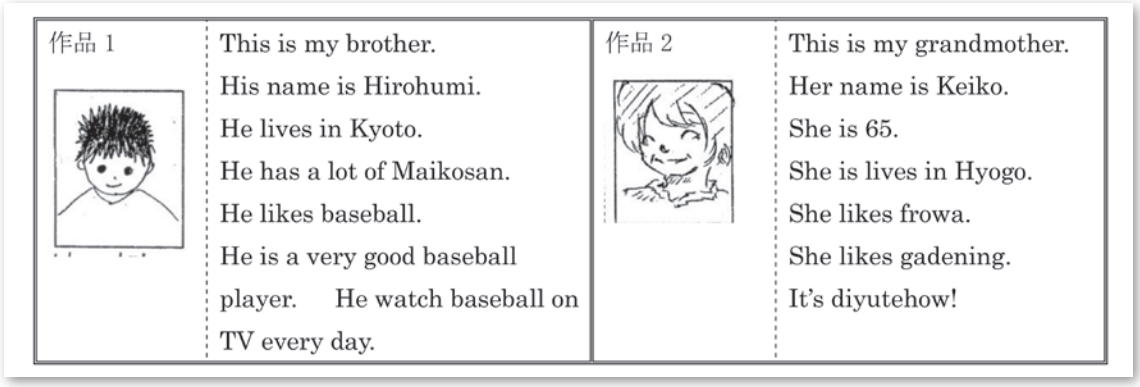
(ヒント)
This is my friend.
He/ She　lives in　＿＿＿＿＿＿(住んでいる町名)
He/ She　plays　＿＿＿＿＿＿(スポーツ名　楽器名)
または　swims very well.　(スウィムズ　ヴェリィ　ウェル　：水泳部)
practices running.(プラクティスィーズ　：陸上部)
practices dramas, engeki　(演劇を練習する　：演劇部)
He/ She likes ＿＿＿＿＿＿.　(食べ物、教科、ＴＶ番組、歌手、キャラクター等)
He/ She watches ＿＿＿＿＿＿ on TV.
He/ She has ＿＿＿＿＿＿.　(ペット、きょうだい、自転車、ゲーム機　など)
He/ She　is in this class./　～　is not in this class.(同じ組にいるか、いないか)
Who is　this boy/ this girl?

■１年生・２学期中間考査で出題

10 文程度のモデルと簡単な語彙リストを与えて書かせる。

grandfather/mother/cousin/ sister/ friend/ スポーツ , 楽器 , 等

採点は、６文以上を目安とし、ディスコース重視。三単現の動詞を正確に使えるかどうかは文法問題で見る。ライティングでは、話題の選定、ディスコース、伝えたいことがあるか、を重視。



作品 1		作品 2	
	This is my brother. His name is Hirohumi. He lives in Kyoto. He has a lot of Maikosan. He likes baseball. He is a very good baseball player.　He watch baseball on TV every day.		This is my grandmother. Her name is Keiko. She is 65. She is lives in Hyogo. She likes frowa. She likes gadening. It's diyutehow!

生徒はモデル文を参考に工夫して書いている。　　注：英文は答案のまま

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

■家族紹介のスピーチ原稿作成

①モデルを与える

②書く内容のアドバイス

家族のいいことを伝える

③下書き用紙に書く

数文ごとのまとまりを作る

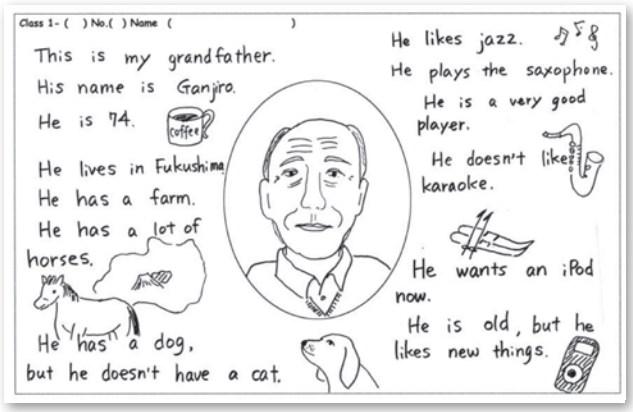
まとまりとまとまりの間にさし絵

語っていないが絵だけもあり

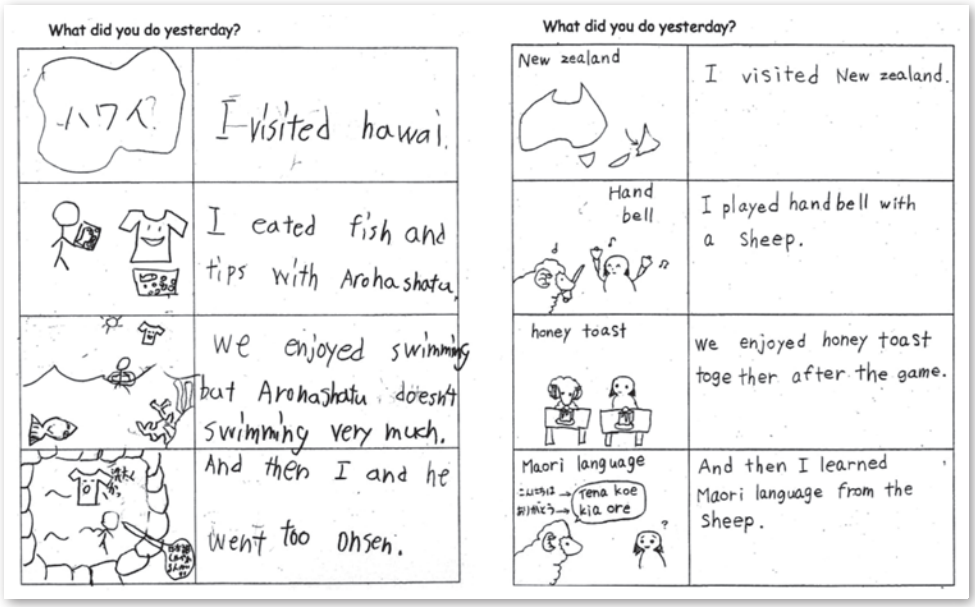
最後の一文を工夫せよ

④教師によるアドバイス→清書

内容が浮かばない生徒へ質問や例提示



■規則動詞過去形を初めて学習した日の宿題。（1年生）went と did は学習済み。



■三人称単数形の指導：動物好きの生徒が飼っていた愛犬のことを書いたもの

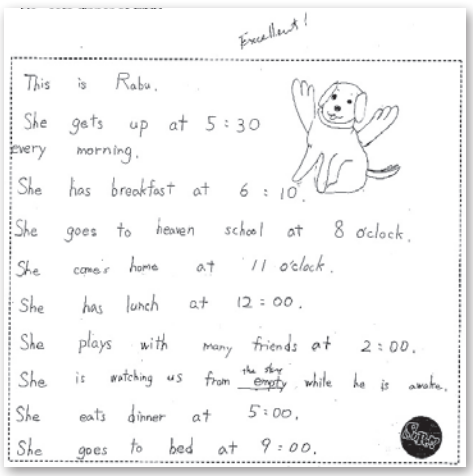
＊教師作成の例文では、生徒がよく知っている犬のキャラクター（イラストも）を使用。

例にならって、誰かの普通の1日を書こう。Name（ ）

This is _____ .
He gets up at 7:00 every morning.
He has breakfast at 7:10.
He plays with _____ from 10 o'clock.

He fights the ____ at 12:00.
He writes a story in the afternoon.

He plays the piano at 4:00.
He eats dinner at 6:00.
He goes to bed at 8:00.



ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

Part Ⅱ　授業の実態から考える「話す・書く」の指導実践②

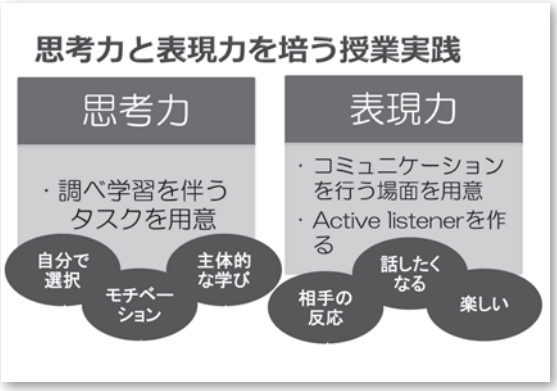
思考力と表現力の融合「話すこと」と「書くこと」を継続的に取り入れるには～高等学校の実践を元に～

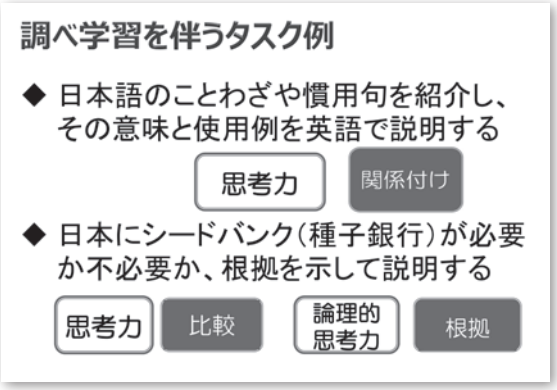
布村　奈緒子（東京都立両国高等学校・附属中学校）

高等学校で「話す」「書く」活動が少ない実態が調査等から明らかになっている。中学校で行われている「話す」「書く」活動を、高等学校でも続けたらどのような形になるかを考えたい。

授業の中で思考し、表現していく活動を取り入れていくと、必然的に「話す」「書く」活動が増えていく。思考力を使わなければいけない場面を授業の中に入れると生徒は、家庭学習で、授業に関連したことを調べ、プレゼンテーションなどの発表練習をし、英語で意見や感想を書く活動を行うようになる。

思考力を培うためには、調べ学習などを伴うタスクを用意すると良い。そのとき、タスクは自分で選択することがポイントになる。自分が選んだものだから自分でやろうとモチベーションが上がり、学びも主体的に変わっていく。





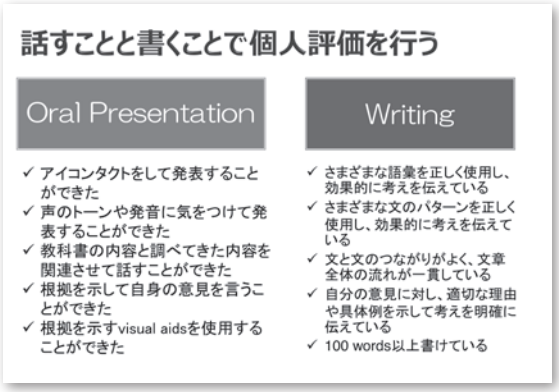
タスクをつくるのが難しいという先生方が多いが、コミュニケーション英語Ⅱになり、タスクがつくりやすい題材や教材が増えた。私がタスクをつくるときには、比較、分類、違い、関係付けの４つを意識している。教科書のことと何か比較できるか、何か分類分けできるか、教科書ではこう書いてあるけれども他と違いはあるのか、生徒の実体験などと関連付けられるか、などを考えながらタスクをつくっている。教科書の題材を使えば、ゼロからつくることはないので、比較的つくりやすい。例えば、英語のことわざやフレーズを紹介するレッスンから、日本に来たばかりの外国人に日本のことわざ、慣用句を説明する、という調べ学習を伴うタスクを用意できる。また、教科書にあるイギリスのシードバンクを紹介した文章を使って、日本にも必要か不必要か、根拠を示して説明させるタスクができる。論理的な思考力をつけるためには、スピーチ活動等を通して、根拠や原因、理由を示して結論を出させる。

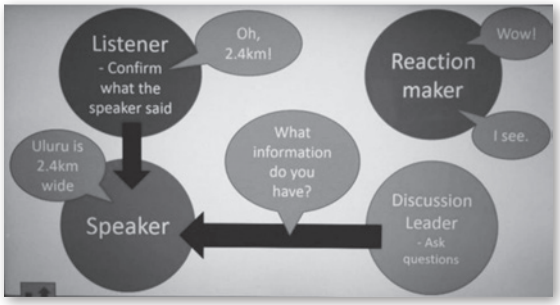
表現力をつけるためには、コミュニケーションを行う場面を授業の中につくる必要がある。例えば、アクティブなリスナーをつくり、スピーチを言わせっぱなしにせず、誰に伝えたのか、伝えたその意味は何だったのか、そこの裏にある言葉の意味は何だろうと考えさせる。相手の反応があると話し手は楽しくなり、もっと話したくなる。４人のグループで、まず「ディスカッションリーダー」が‘What information do you have? ’と質問し、それに対して「スピーカー」が話す。もう１人の「リスナー」はフンフンと聞いていればよいが、‘Confirm what the speaker has said.’と役割を与えると、確認するっ

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

てどうすればいいんだとなる。リピートすればいいんだと伝えると、それならできると生徒たちはみんな思う。そして一生懸命「スピーカー」が言っていることを聞く。一生懸命聞いてもらうと、どんどん「スピーカー」は話したくなる。もう 1 人は「リアクションメーカー」なんて名前を作ったが、'Oh.' とか 'I see.' とか 'Fantastic! ' とか、1 日ワンフレーズ増やしてあげるとどんどん使って楽しくなっていく。

生徒が活動をしないという声を聞くが、すべての活動をつなげるとやるようになる。調べ学習（家庭学習）をたくさんするとディスカッションで活躍できるという実感があるから、予習をする。ディスカッションでたくさん話ができればできるほど個人発表の評価が高くなる。個人発表がうまくいくと、それを実際にライティングするときにもうまく書ける。すべてをきちんとすれば自分の得になる、個人評価にもつながるのだということを実感できれば、いろいろな活動を自らしてきてくれるようになる。



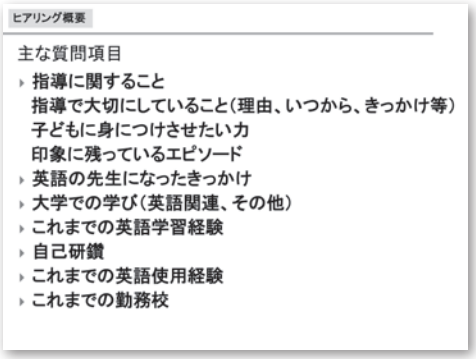


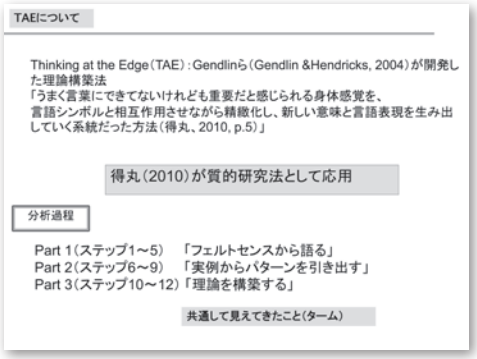
第４部　研究発表：
授業改善への最初のステップとは　～「教員聞き取り調査」より～

研究メンバー
髙木　亜希子（青山学院大学）
工藤　洋路（駒沢女子大学）
重松　靖（東京都国分寺市立第二中学校／東京都中学校英語教育研究会会長）
加藤　由美子（ベネッセ教育総合研究所）
福本　優美子（ベネッセ教育総合研究所）

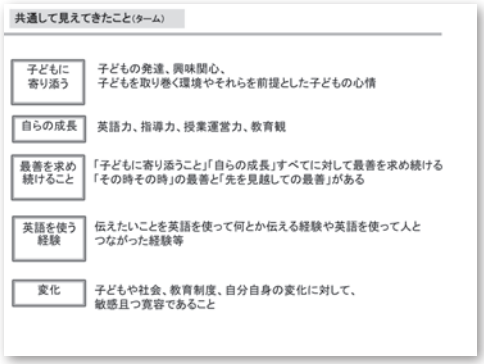
本研究では、「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」を踏まえて、文部科学省「新学習指導要領に対応した授業実践事例映像資料」で授業実践をされている、中学校・高校の先生方 6 名に、聞き取り調査を行い、指導力向上のヒントを探った。分析は TAE という手法を使った。聞き取りにご協力いただいたのは、土屋裕子先生（静岡県浜松市立入野中学校　DVD 出演時：静岡県浜松市立南部中学校）、杉光いづみ先生　（佐賀県嬉野市立塩田中学校　DVD 出演時：佐賀県鹿島市立東部中学校）、川崎恵美子先生（青森県むつ市立田名部中学校）、植木明美先生（茨城県立竹園高等学校）、津久井貴之先生（お茶の水女子大学附属高等学校　DVD 出演時：群馬県立中央中等教育学校）、亀谷みゆき先生（岐阜県立東濃実業高等学校）であった。

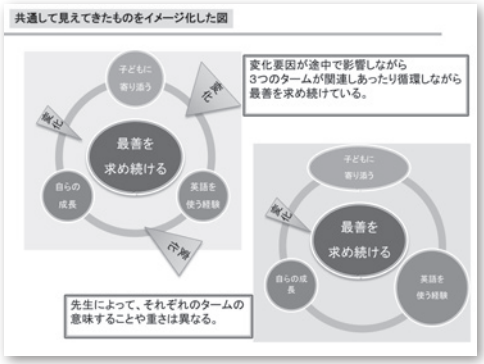
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

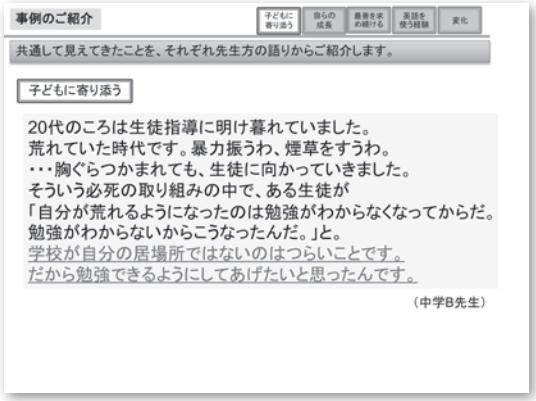


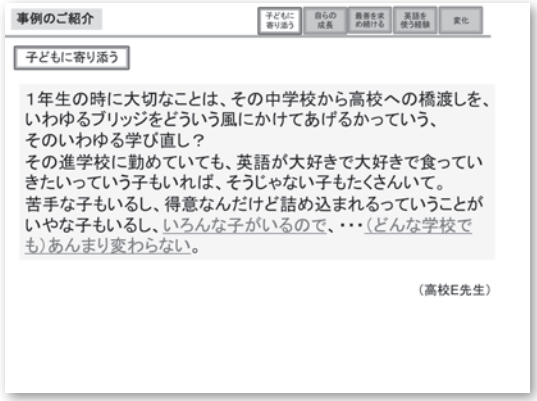


今回の調査から５つのキーワード、①子どもに寄り添う、②自らの成長、③最善を求め続けること、④英語を使う経験、⑤変化、が共通して見えてきた。「子どもに寄り添う」では、学校だけではなく、日常生活における思春期独特の繊細な感情の動きにも愛情を持って寄り添う姿が現れてきた。「自らの成長」では、英語力を伸ばすために自己研鑽する以外に、授業研究などで自身の実践を振り返り、新しい挑戦をしていく中で教育観、指導観を発展・進化させている様子が、また「最善を求め続けること」では、「子どもに寄り添う」、「自らの成長」に最善を尽くしながら、短期、中期、10 年後、15 年後の長期を見越して何をすべきかをいつも考えている姿が浮かび上がってきた。「英語を使う経験」では、英語を使って人と繋がる素晴らしさや喜びを体験し、それを生徒に伝えたいと思っていることが見えた。最後に「変化」では、子どもの日々の変化から社会の変化まで敏感に感じ取り、受け入れ、寛容に次のステップに進む様子が見られた。この５つのキーワードのうち、２つのキーワード（「子どもに寄り添う」、「変化」）を取り上げ、ポイントとなった具体的な先生方の言葉、エピソードを紹介する。

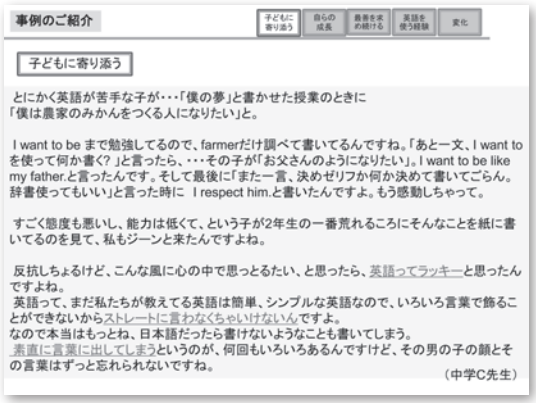


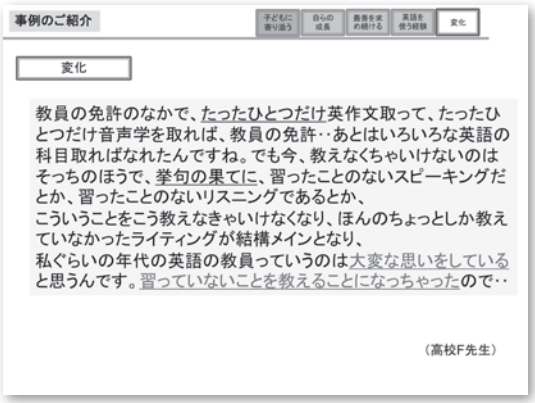


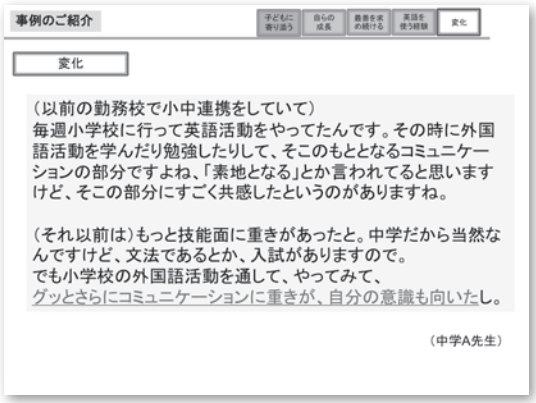


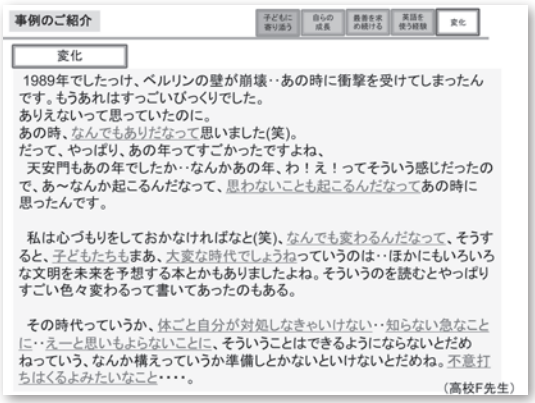


© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.


事例のご紹介
子どもに寄り添う
自らの成長
最善を求め続ける
英語を使う経験
変化
子どもに寄り添う
とにかく英語が苦手な子が･･･「僕の夢」と書かせた授業のときに
「僕は農家のみかんをつくる人になりたい」と。
I want to be まで勉強してるので、farmerだけ調べて書いてるんですね。「あと一文、I want to を使って何か書く？」と言ったら、･･･その子が「お父さんのようになりたい」。I want to be like my father.と言ったんです。そして最後に「また一言、決めゼリフか何か決めて書いてごらん。辞書使ってもいい」と言った時に I respect him.と書いたんですよ。もう感動しちゃって。
すごく態度も悪いし、能力は低くて、という子が2年生の一番荒れるころにそんなことを紙に書いてるのを見て、私もジーンと来たんですよね。
反抗しちょるけど、こんな風に心の中で思っとるたい、と思ったら、英語ってラッキーと思ったんですよね。
英語って、まだ私たちが教えてる英語は簡単、シンプルな英語なので、いろいろ言葉で飾ることができないからストレートに言わなくちゃいけないんですよ。
なので本当はもっとね、日本語だったら書けないようなことも書いてしまう。
素直に言葉に出してしまうというのが、何回もいろいろあるんですけど、その男の子の顔とその言葉はずっと忘れられないですね。
（中学C先生）


事例のご紹介
子どもに寄り添う
自らの成長
最善を求め続ける
英語を使う経験
変化
変化
教員の免許のなかで、たったひとつだけ英作文取って、たったひとつだけ音声学を取れば、教員の免許･･あとはいろいろな英語の科目取ればなれたんですね。でも今、教えなくちゃいけないのはそっちのほうで、挙句の果てに、習ったことのないスピーキングだとか、習ったことのないリスニングであるとか、
こういうことをこう教えなきゃいけなくなり、ほんのちょっとしか教えていなかったライティングが結構メインとなり、
私ぐらいの年代の英語の教員っていうのは大変な思いをしていると思うんです。習っていないことを教えることになっちゃったので･･
（高校F先生）


事例のご紹介
子どもに寄り添う
自らの成長
最善を求め続ける
英語を使う経験
変化
変化
（以前の勤務校で小中連携をしていて）
毎週小学校に行って英語活動をやってたんです。その時に外国語活動を学んだり勉強したりして、そこのもととなるコミュニケーションの部分ですよね、「素地となる」とか言われてると思いますけど、そこの部分にすごく共感したというのがありますね。
（それ以前は）もっと技能面に重きがあったと。中学だから当然なんですけど、文法であるとか、入試がありますので。
でも小学校の外国語活動を通して、やってみて、
グッとさらにコミュニケーションに重きが、自分の意識も向いたし。
（中学A先生）


事例のご紹介
子どもに寄り添う
自らの成長
最善を求め続ける
英語を使う経験
変化
変化
1989年でしたっけ、ベルリンの壁が崩壊･･あの時に衝撃を受けてしまったんです。もうあれはすっごいびっくりでした。
ありえないって思っていたのに。
あの時、なんでもありだなって思いました(笑)。
だって、やっぱり、あの年ってすごかったですよね、
天安門もあの年でしたか･･なんかあの年、わ！え！ってそういう感じだったので、あ～なんか起こるんだなって、思わないことも起こるんだなってあの時に思ったんです。
私は心づもりをしておかなければなと(笑)、なんでも変わるんだなって、そうすると、子どもたちもまあ、大変な時代でしょうねっていうのは･･ほかにもいろいろな文明を未来を予想する本とかもありましたよね。そういうのを読むとやっぱりすごい色々変わるって書いてあったのもある。
その時代っていうか、休ごと自分が対処しなきゃいけない･･知らない急なことに･･えーと思いもよらないことに、そういうことはできるようにならないとだめねっていう、なんか構えっていうか準備しとかないといけないとだめね。不意打ちはくるよみたいなこと････。
（高校F先生）

6人の先生に加えて聞き取りを行った研究メンバー2名の先生からのコメントを紹介する。

工藤先生のコメント：

「子どもに寄り添う」「自らの成長」「最善を求め続けること」「英語を使う経験」「変化」という共通して見えてきたタームの1つ1つが大事なことだと思う。ただし、大事だと思って、このうち1つを選んで、例えば「明日から子どもに寄り添うぞ！」と始めても、授業の基本的な構成がうまくいっていなければ、それがうまくいかないケースもあるかもしれない。授業にはいろいろな要素が背後にあり、何を先に解決したらいいかは、それぞれのティーチャー・デベロップメントの中で順序に違いがあるだろうし、プロセスも違うかもしれない。ある方向が駄目なら別の方向からトライするなどといった、循環的なサイクルを考えることが非常に大事になるだろう。

私が教員を始めた当時は、あまりクリエイティブなことをさせると対応が大変だから答えが1つのメカニカルなものをしようという意識が働いていたように思う。しかし、これからは、いろいろな変化に対応できるスキル、そして変化に動じない大きな心を育てるために、教師が思い切ってクリエイティブな活動をすることが求められる。今回のヒアリングは、対象が6人というデータだったが、質的に捉えて結果をまとめるという意味では、大変意義があった。

重松先生のコメント：

自分も含め共通しているのは、純粋に子どもが好きということ。教師としての使命感、情熱に加え、子どもたちが生き生きと活躍する授業をしたい。そうすることで振り返って自分も楽しめ、自分も生き生きとできると思う。

「英語が分からない、つまらない」という子どもをどうするかといった短期的な視点。中期的には、高校入試で戦う力を目指す授業組み立てが大事。そして、10年後、20年後の子どもを考えた視点。10

© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

年経っても２０年経っても「英語を勉強しなければいけない」という意欲、英語の学び方、さらには、こんな生き方をしたいと考えさせる視点を大切に子どもと接しなければならない。そういった視点で子どもを見据え、均等にバランスよく指導しなければならないと感じた。

コミュニケーション重視の進歩的な授業をしている先生方はいるが、１０人いれば１０人とも指導の仕方が違う。授業改善の第一歩として、先生方一人ひとりが、自分は他の人と何が違うか、自分の強みをまず知って、そこを授業の中で活かしていくことが大事だ。いろいろなところで子どもたちが生き生きするような授業をしていただけたらと願っている。

第５部　自由討議：
子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは？

コーディネーター　　吉田　研作（上智大学）

パネリスト

アレン玉井　光江（青山学院大学）

金森　強（関東学院大学）

田中　茂範（慶應義塾大学）

長沼　君主（東海大学）

根岸　雅史（東京外国語大学）

吉田　研作（上智大学）

加藤　京子（東洋大学附属姫路中学校／前三木市立緑が丘中学校）

布村　奈緒子（東京都立両国高等学校・附属中学校）

第４部の研究発表終了後、シンポジウムの参加者には、それまでの全プログラム（講演・調査報告・指導実践・研究発表）をそれぞれの立場から振り返ってもらい、自身の指導や教育において大切にしていること、子どもたちにつけてもらいたい力、具体的な行動目標などを「振り返りリーフ」に記入してもらった。第５部は、リーフの内容に対しての、ARCLE 理事･研究員の先生方のコメントから始まった。

金森先生のコメント：

スイス・バーゼルは、複言語主義（Plurilingualism）で、２言語、３言語を一緒に学んでいる。プルリリンガリズムと言う概念自体に正確さを強く求めない、ネイティブのような言語レベルまでは求めないことが含まれているが、あえて、ファンクショナル・プルリリンガリズムと呼ぶことで明確にしていると言える。指導は CLIL が中心。教科書とワークブックが授業での活動と繋がり、Dossier（作品・学習成果）が結果として残り、自身の学習の履歴の一部が記録される。ELP（ヨーロピアン・ランゲージ・ポートフォリオ）の形で残され、振り返り（Reflection）を通して自律的な学習者を育てることにも使用され、指導と評価の一体化にも役立っている。次の学習指導要領では、全教科集まってクロスカリキュラムの発想での CLIL 的なアプローチでの新しい教科書づくりができれば良いと思う。

生徒がなぜ書けないかというと、語彙力がない。文法の知識がない。パラグラフの構成を知らない。書く内容がない。書きたいという心がないからと理由は様々である。原因に適した手立てを行わない限り効果は期待できない。また、書く（発信する）ことを意識させた読み方（聞き方）を先生たちが進めない限り、発信には繋がらないのではないだろうか。

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

今後小学校で教科化されるのであれば、中学３年生時に、どうなっているかもみていく必要がある。少なくとも英語が好きなままでいられるような小中連携と接続に期待したい。

長沼先生のコメント：

リーフを見ていて、「教員になったばかりのころは知識を詰め込むことだと思っていたが、経験を通して学ぶことの楽しさに気付き、自ら調べ、英語を使ってみることが教員の責務だと思うようになった」というコメントが面白いと思った。教師もユーザーとして教室内での学びを楽しんでいるという経験を生徒と共有できているか、そして、日ごろから自分も英語に親しむ経験をしているかが重要になる。教材研究しなきゃと思うのではなく、自分の興味があること、面白いと思うもの、生徒と価値観を共有したい、伝えたいと思うことをレッスンに入れることで、生徒の興味も高まる。

「われわれは、ウォーキング・ディクショナリーじゃない」「採点マシンじゃない」と ALT は話す。彼らの多様なバックグラウンドや専門性を引き出した授業を展開することで、ALT の興味や価値観が伝わり、英語で学んでいる内容そのものに興味を持ち、もっと知りたいといった知的好奇心や考えを共有したいといった価値観が根付いていくこともある。

アレン玉井先生のコメント：

これからの変化に対して自ら良い授業ができるように変化し続けたいという強い思いが、たくさんのリーフに書かれていたことは、素晴らしいと思った。今回行われた TAE はまだ始まったばかりの研究だが、一人称研究として、自らの文脈の中で先生としての行動、信条、認知を確かめる上でとても有効な研究方法だと思う。

最近私は、コミュニケーションに関する考え方を変えていきませんか？と保護者に話をしている。コミュニケーションとは、I と YOU 、その間に WE ができあがる。WE をつくり上げるには、ネゴシエーションも含まれて、決してスムーズではない。でもこの WE をつくり上げることが、これからのコミュニケーションにおいて重要になってくると考えている。「ぺらぺら」という感覚ではなく、「ごつごつ」とした感覚だろうか。国際化が進んでおり、「子どものために」ではなく、保護者が自分ごととして、自ら英語と関わっていく必要がある。

ニナスパーダは、バイリンガルになるためには 5000 時間かかると言っている。日本の小、中、高の授業数を計算すると、1000 時間強である。その環境で、どの程度の英語話者を教室内で育成するのか。ちゃんとした目標をつくりながら使える英語を、その子にとって２番目の言語になるように英語を育てていきたい。

田中先生のコメント：

プルリリンガリズム（plurilingualism: 複数言語主義）を学校教育に取り入れていく場合、先生たちのスタンスがとても大切になる。国際共通語としての英語とは、アメリカ人、イギリス人の規範に合わせた英語ではなく、いつどこで誰とどこまでも、どういう人か分からないけれども英語を使う機会があ

© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

るものへシフトしていかなければならない。つまり、カルチュラル・ノームズからシチュエーショナル・ノームズにシフトしていかなければならない。シチュエーションごとに、その場の適切さが決まるため、アジャストメントの能力がキーとなる。英米系に合わせるのではなく、お互いに調整できるかである。調整する力を鍛えることが重要となるので、そこを意識した教材づくり、活動づくりをしていく必要がある。

「生徒の得意はいろいろ」という、素晴らしい言葉があったが、一人ひとりのニーズやパーソナリティを大切にしたい。英語は言葉だから、誰でも学べるという確信を持つことが必要である。言葉は、言葉として扱えば誰でもできる。その感覚を増やすタスクが、Can-do にシフトしていくことで、期待が持てる。Can-do が身につくと、できる達成感が、学習を内発的に突き動かす。先生の課題は、どういうタスクをすれば生徒が喜ぶか、面白がるか、達成感までたどり着くための支援を考えること。そして、教科としての英語から言葉としての英語に先生自身が意識的にシフトしていくことが、重要となる。

根岸先生のコメント：

教員聞き取り調査の中で共通していたのは、「新しいことが出てきたときに、とりあえずやってみよう」というメンタリティが先生方にあること。それは正しいことをやるということでもなく、何でも無批判に受け入れるわけでもないが、絶対的に拒絶でもなく、取り入れてみてどうするかを判断していく姿勢があったことが興味深い。

英語教育では、どこかのステージで、実際に自分自身で英語を使ってみることがポイントで、うまく使えない経験や、コミュニケーションの中で何が本当に大切なのかを考える経験がとても重要だと読み取れた。文法の問題集などで正解を得ることだけでなく、うまくいかなかった経験が、先生方ご自身の学びの中で重要な部分を占めていると感じた。

～質疑応答～

会場からの質問①　書くことの恐れを取り除くアプローチで、ターゲットになる文法項目を集中的に取り扱っているときはよいが、学期や時間が進んだ後のフォローアップはどのような活動が有効か。

加藤先生　絶えずノートを持たせて定期的にライティングを続けている。例えば、自分が外国に行った設定で、そこから担任の先生なりに手紙を書くという場面で書かせると、過去形と現在形が混ざったライティングのトレーニングになる。他の時制を学ぶことにより、現在形の持つ意味がよく理解できると考えている。

会場からの質問②　中高生の英語学習で、文法項目に関してつまずきがあっても、その手当てができていない。現場では、ものすごく文法を難しく教えている気がする。文法用語は教えるべきか。お知恵があればお教えいただきたい。

加藤先生　文法用語は教えても良い。しかし、文法用語を教えて、教えたことにしているのは間違い。使えるようにしておいて、文法用語を使うと整理ができる。例えば、三単現を「他の人に説明すると

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

きの動詞の形」と最初は教えているが、ある程度の理解が確認できたら、「これは三単現のｓと言うよ」と教えている。動名詞も整理という形で「名詞と置き換えられるから動名詞と言うよ」と説明する。文法用語の説明の仕方は、まず感情や場面の理解を十分させ、その後で文法用語で記号付けをする感じで行っている。「全く過去と関係ないのになぜ過去分詞と言うのだろう？」などと、生徒は思わぬところでつまずく。子どもたちの声に耳を傾けて指導しなければ駄目だと思う。

田中先生　先生は自分が文法が得意だと思いながら、自分が慣れ親しんだ用法を鵜呑みにして再生産的に使うことは良くない。文法をよく分かった上で、意味付けができ、生徒にちゃんと伝えなければならない。

吉田先生　文法用語は、教えただけで何もしないのが一番問題で、内容が分かった上でラベルを貼る活動は合理的だと思う。

会場からの質問③　高校、中学での ALT の活躍は、どのようなものが理想か、何かご意見をいただきたい。

布村先生　私たち日本人の教師が、生徒に対してできないのは、「自分の英語が日本語話者ではない人に伝わった」という達成感を生徒に感じさせること。英語が伝わったという達成感を身につけさせてあげられるように、本校の中学校では、１分間チャットという活動を始めた。毎回１人必ず１分間、ALT もしくは JET の先生と教室の外で話す。間違ってもいいからとにかく１分間話し続ける時間をつくっている。

～まとめ～

吉田先生：

国際共通語としての英語は、ある特定の国の言語ではない。言語と文化は表裏一体ではないかという考え方もあるが、マイクロカルチャーという言葉があり、例えば私と誰かが話しているうちに、二人の間に共通に持っている文化が生まれ、共通のマイクロカルチャーが形成される。

お互いが同じ１つの価値観を共有していると、問題解決が早い。言葉だけ分かっていても、全く違う価値観だと、うまく問題解決できない。言葉を使うときの根底にお互いがコミュニケーション活動をするという認識があれば、より話が弾んでいく。相手が言ったことをうまく活用していくと、「私が言っていることに興味があるな」という雰囲気が生まれる。興味を示すことが、話題を共有する大事なステップになると思う。その意味でも、本当に子どもを思いやる気持ち、子どもを知るという大切さ、子ども同士がお互いにコミュニケーションしていくことの大切さが、まず根底になければ、語学教育の改革もうまくいかないような気がしている。

今日は本当にものすごく盛り沢山で、膨大な情報量をいただいたが、最後にみなさんのご意見をいただいたり、リーフを書いてもらったりしたことが良かった。みなさんの考えておられることが分かったので、大変充実した１日だった。

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

「振り返りリーフ」

シンポジウムの最後には、教員、研究者、学生、教育行政関係者、民間事業者などそれぞれの立場から、自らの教育観や指導などを振り返り、気付きや今後の行動目標を「振り返りリーフ」に記入いただき、「振り返りの木」に貼り、参加者同士で共有を行った。

シンポジウム参加者は、当日考えたこと、新たに立てた目標などを思い出しながら、引き続き、その目標を行動に移すエネルギーにしていただくため、また、参加されていない方には、さまざまな立場の参加者の振り返りを読み、新たな示唆などを得て、自ら変化するための行動の一歩を踏み出すきっかけになればと、リーフに記述された内容を紹介する。

■「振り返りリーフ」作成の目的

1、シンポジウムプログラム（講演・調査報告・指導実践・研究発表）を通して考えたことをもとに、それぞれの立場で、自分自身の指導観・教育観を振り返る。

それぞれの立場とは？

●現場の教員⇒生徒に直接指導を行う
●研究者⇒研究と実践をつなぐ、教員を養成する
●行政⇒教員に研修などを行う
●学生⇒教えられる立場である、今後は生徒を指導する
●民間⇒教材、教科書、テストなどを制作する

2、一人ひとりの振り返りをできるだけ多くの人と共有し、学び合う。

■「振り返りリーフ」に記入された内容

1．指導や教育において大切にしていること、子どもたちにつけてもらいたい力
2．1を踏まえて、これから何をしようと思うか、それは何のためか？

■シンポジウムで理事が選んだリーフの紹介（全て原文のまま掲載しています）※（　）の中は当日のリーフ番号を指します。

・高校教員……教員になったばかりのころは知識を詰め込むことだと思っていたが、経験を通して学ぶことの楽しさに気付き自ら調べ英語を使ってみることが教員の責務だと思うようになった。(68)
・学　　生……「変化」は教員・生徒（児童）のみにふりかかるのではなく、「親（保護者）」にもふりかかる。自分が受けてきた教育と子ども達の教育に大きな違いがあることで、良い場合と悪い場合があるのではないだろうか。(98)
・教育行政関係者……調査の結果は、日頃感じていること、現場で感じていたことが現れていると感じた。(解釈の仕方にもよるが)、子供の意欲をのばす指導と、英語力をつける指導は同じ方向を向いていると感じた。(213)
・高校教員……英語に関する意識について、「英語のテストでいい点をとりたい」という意識が強いのにどうしてもレベルに合わない教材（難易度が高いもの）を使いがちである。これは、しっかりとレベルを考えて教科書を選ぶ必要があると思った。1点疑問に思うのは大切である事の項目で「英語のテストでいい成績をとる」が低い事である。(220)
・中学校・高校教員…やっと受験のための英語の授業という呪縛から解放される。non-native English で自ら発信していくことを目指した授業にとり組みたい。(221)
・高校教員……英語教員の聞き取り調査の報告にすごく感動しました。このようなコメントを普段の学校の中で教員同志が共有して、互いに学び合える場面を作っていこうとする姿勢が、全ての出発点になっていくと思います。(229)
・高校教員……私は子供たちに「間違いを恐れない事こと、自分と違うものに対して寛容になること」、この二つを身につけてほしいと考える。そのために、自分の経験を生徒に伝えること、活動の目的や目標を見失うことなく、指導していきたい。(233)

■所属別のリーフ内容一覧（全て原文のまま掲載しています）※（　）の中は当日のリーフ番号を指します。

【教員・高校】

●高校

・学習者以上に教員も学び続けなければならないし、その姿勢がとても大切である。学習し続けることで輝ける。(20)
・授業者としてやるべきことが見えました。明日の授業に活かします。ありがとうございました。(23)
・東日本大震災被災県の高校生が、胸を張って英語で自分の思いを語り、郷土、国、地球の未来に誇りを持って関わっていけるような動機づけの契機となる授業を実践します‼(26)
・教材で取り上げられているトピックを基にエッセイ・ライティングやディスカッションをさせたい。これらはコミュニケーションの根底にある World Knowledge の育成につながると考えています。(52)
・1. 英語は言語・コミュニケーションをするための道具であるので、私自身が生徒に英語で何を伝えたいか、生徒から何を伝えてもらいたいかはっきりさせて、信頼関係を持って授業をしたい！
2. 授業をもっと英語で行うために、生徒へのアシスト（scaffolding）を適切に行って、少しでも話せた！と充実感をもってもらえるようにしたい！（55）
・高校英語教師として、生徒に他者とことばでつながり合う喜びや幸せを感じてほしいと思います。豊かな言語活動を通じて、自己や他者の新たな出会いを提供してあげたいと思います。(58)
・1. 英語が本当に必要な時代に備えて使える力

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

2. 自己研鑽と 1 の事が可能になる授業の仕組み作り（62）
・教員になったばかりのころは知識を詰め込むことだと思っていたが、経験を通して学ぶことの楽しさに気付き自ら調べ英語を使ってみることが教員の責務だと思うようになった。(68)
・習っていないことを教えるのは大変ですが、がんばります。特に creative writing に TRY したいと思います。(70)
・大学入試の対策をひとつ取っても、自由英作文対策が必要な生徒、国公立二次で英訳、和訳が必要な生徒、センター試験だけで済む生徒と様々です。多様なニーズに応えつつ、コミュニケーション力を上げていくための具体的な研究があれば是非聞かせて下さい。(77)
・他教科の教員との協力が必要だと思いました。英語でプレゼンテーション、ディベートをする前に国語の授業で簡単でいいので説明してもらうと、英語の授業では日本語の説明が省けて all English ですすめられると思いました。(104)
・①大切にしていること：コミュニケーションはまず相手の言っていることを聴き、自分の言いたいことを伝える。"I" のある人になってもらいたい。愛は相手の心を受け止めるという意味も含めて。②そのために "授業改善" を行う。(107)
・気づき（noticing）が大切であるとすれば、私たち教師も今日の研修から 1 人 1 人が自ら振り返り自分なりの気づきが必要。与えられて " なるほどそうですか…" ではなく、生徒に求めることを我々ができているか…改めて大切だと思いました。(116)
・幅広い視野に立った物の見方や考え方のできる思いやりの心を持った人間形成をめざしたいと考えています。そのためにさらに教員自身も学び続ける姿勢を忘れず、子供の個性や能力を時代や環境の変化に適応できる（適応しながら）教育活動を行うことの必要性を感じました。(146)
・新卒かつ 1 年目なので、模索中ですが、自らの意見を様々な方法で発信できる力を身につけてほしい。そのためには、情報の取捨選択能力、IT 機械の使い方、そして「日本人らしい英語」を指導したい。(149)
・学んだことを、実際に使うことでマスターできるような場面を作ろうと心掛けている。そのために、段階を踏んだタスクを用意し、無理なく自己表現できるところまでつなげていくように授業作りをしている。(158)
・1. 生徒が思ったこと、言いたいことを英語で発信できるようにしたい。
2. 理解→定着→応用のプロセスを意識した指導「使ってみよう」と気にさせる指導を心掛ける。（若手がどのようにしたら採択教科書のレベルを下げられるのか）(161)
・1. 生徒の表情・反応を見ながらインタラクティブな授業をする。教え込むのではなく、みずから学び気づきを与える機会を作ること。
2. 英語を使う機会を多く設ける　例）スピーチ⇒今後、生徒に必要となることだから。(182)
・1. 生徒には「英語の楽しさ（コミュニケーションをとる喜びと日本語以外の言語に触れる喜び）」を知ってもらい「英語を（少しでも）使えた」という成功体験を積んで欲しい。そうすれば卒業後も、自分の必要に応じて学習を続けられる。
2. 生徒にたくさんの英語使用機会を提供。失敗してもいい雰囲気づくり。(186)
・年々英語へのニーズも高まり、生徒らも感じとっているようですが、反比例して学習時間が減っているようです。自律的学習者の育成のためには、中高でいかに自分で勉強させられるかが大事です。(190)
・若い頃は先輩教師がしていることが絶対に正しいと思い、その実践に何の意味がなくても、期待した結果が出なくても、それは私の考え方が悪いんだと思っていました。今は、私が若い人にアドバイスをする立場です。しっかりとした理論にもとづいた指導にしないと、授業を受ける生徒だけでなく、先生も育たない、これからの日本を築くために自分がどうあるべきかを考えさせられました。(207)
・どの生徒も英語を使えるようになりたいと思っていることを改めて確認。生徒の思いに応える指導をしなければと気持ちを新たにした。(217)
・英語に関するいしきについて、「英語のテストでいい点をとりたい」という意識が強いのにどうしてもレベルに合わない教材（難易度が高いもの）を使いがちである。これは、しっかりとレベルを考えて教科書を選ぶ必要があると思った。1 点疑問に思うのは大切である事の項目で「英語のテストでいい成績をとる」が低い事である。(220)
・英語を勉強する楽しさ、「やればできる」ということを英語を通して身につけてもらいたい。相手を知ろうとすること思いやりを持つことでより多くの人とコミュニケーションをとれることを実感できるようにしたい。発想、クリエイティブな志向のある授業にしていきたい。(228)
・英語教員の聞き取り調査の報告にすごく感動しました。このようなコメントを普段の学校の中で教員同志が共有して、互いに学び合える場面を作っていこうとする姿勢が、全ての出発点になっていくと思います。(229)
・小・中で「ほめられた体験」が少ないようで、何事にも自信が持てない生徒がたくさんいます。英語の授業で non-native の英語を聞く機会の多い生徒は、自分が話す英語にも自信を持つようになるとのことでした。私自身が English learner であるという意識で、英語で考えを伝える、生徒の考えも引き出し続けたいです。(231)
・私は子供たちに「間違いを恐れないこと、自分と違うものに対して寛容になること」、この二つを身につけてほしいと考える。そのために、自分の経験を生徒に伝えること、活動の目標を見失うことなく、指導していきたい。(233)
・授業づくりをする上で、改めてディスカッション、ストラテジーとしても echoing（リピーティング、相づち）の効果と information gap の重要性必要性を感じている。(239)
・間違いを恐れずに、英語でコミュニケーションをする力をつけてもらいたいと思っています、英語の授業が発言しやすい時間となるよう心がけています。今後はもっと英語を使う活動を増やしていきたいです。(274)
・英語教育で上手くいっている行政・指導もあると思います。例えば、今回の実態調査では、中学生の学習内容の理解や苦手意識が大幅に改善されていました。その原因を含め、このまま継続していくべき指導についてご教授下さい。(275)
・中学 1 年の頃、なぜ英語を勉強しなければならないか分からなかった。そんな時、洋楽と出会い、歌詞やアーティストのインタビューを英語で理解したくなった。その後短期留学した時、ホームシックの気持ちを誰かに伝えたくなっ

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

た。必要だからやってきた。教員として飢餓感に近い必要をかんじさせたいと思っている。(303)
・授業づくりにおいて大切にしていることは…　・自分もたのしめる授業にすること・生徒と一緒に学ぶこと：発音などはネイティブらしい発音でなくても、いっしょにちょっと日本語なまりの英語で大きな声で発音、話す。(318)

【教員・小中、その他】
●小学校
・小学校英語活動にかかわる仕事をしています。「言葉は文脈の中にあって生を得る。」「文法は感情とつながっている」という先生方のコメントが印象的でした。小学校で感情を言葉にのせるコミュニケーションを英語活動で十分体験できるようにすることで、中高で文法を学ぶ際にも、文法が文脈の中で心を表現するものということがより実感できることにつながるのではないかと感じました。(64)
・英語は勉強（教科）でなく「コミュニケーションのツール」であることを子供達に伝えたいです。そのために、コミュニケーションを重視した授業をしていきます。「伝わった」「伝えられた」喜びを感じさせたいです。(91)
・1. 自分の気持ちを表現するのに抵抗が少ない小学生のうちに、母語でも同様の機会を与えたいと改めて感じた。
2. 小学生の生の反応を掘り下げて分析し、指導内容・方法を突き詰めていく必要がある。正しいものがまだない（存在しない）から。(194)

●中学校
・英語の必要感を少しでも伝えていきたい。身近な話題からクリエイティブな考えを持たせる授業づくりをする。(19)
・1.「未知な事に対して関心を持つ→自分の考えをもつ→異なる価値観に寛容である→自分変革できる」生徒を育てたいです。
2. 何をしようと思うか…　英語を使う（コミュニケーションする）必要感、目的感を生徒自身が感じられる場の設定や指導の工夫。オーセンティックな（教材の開発）　→実際にどんどん使わせてあげること。(30)
・自分が先頭立ってリードするのではなく、生徒達を後ろから見守りたい。それが「教えすぎない事」や「自立した学習者」につながっていくのかもしれない。(45)
・私はかつて創作ノートを行ったことがあります。アルバムとして生徒には残るし、内容をみていくといつのまにかまとまった英文になるきっかけもそこにはあります。今はいきなり 2 年生の場合なので、思考力をつけるためのヒントを資料活用で行っています。(54)
・根岸先生の仰っていた「だいたい分かる」と思える文章をたくさん読むというのは本当に大切だと思います。そのために教員として何が出来るのだろうかと思います。(105)
・英語を使う場面、目的、楽しさを共有したいという気持ちで毎日教えています。しかし、その思いで一方向的になりすぎていないかと考えました。大切なのは、生徒が気づき思考すること。そんな授業づくりを目指します。(151)
・教師になった最初のきっかけは、自分が教わった先生、ドラマに出てきた先生を見てそうなりたいと思ったから。生徒と関わることで、苦い思いをしたこともあったが、それ以上に感動を与えてもらったことに感謝している。一年の中で一度でも涙の出る程の感動を共有できればよいと思っている。英語に関しては、もっと英語が好きになるような指導法を工夫したいと思う。(172)
・①まず自らが生徒に英語で情報を発信し、表現するモデルになる　②生徒を良く見て、"変化"や"彼らの声"に敏感になり、反応していくことが大切。(255)

●中高一貫校
・1）生きている実感 2）授業に行くのが楽しくなるような実践活動とそれを可能とする評価基準の変更。それは自分が満足するため。(2)
・生徒が求めている英語教育と私が提供しているものが大きく違っていた。訳読によって英語の教材を死なせたくないと思った。(13)
・1. 子供を教育していることを再認識した。「学びつづける力」をつけさせたい。
2. 英語で教える。英語を教える。(39)
・1. 今迄の授業内容を検討していく。
2. 実際に情報をフル活用し使える英語をより活用出来るよう教師が学ぶようにする。3．母国語教育 CHL の実践をフルに授業に取り入れて他教科の先生方と協力し共に学び合う。(120)
・自分の考えを相手に正確に伝えること。相手の意見に耳を傾けることを大切にして欲しい。そのために自信をつけさせたい。(147)
・やっと受験のための英語の授業という呪縛から解放される。non-native English で自ら発信していくことを目指した授業にとり組みたい。(221)
・生徒たちのコミュニケーションが一番大切だと考えています。ペーパーテストでの英語力はあるのにコミュニケーション能力が低い為に話せない生徒の為に自己表現の場が必要と再確認できました。(263)

●高等専門学校
・やはり「文脈」の大切さを再認識しました。読解は「形」から「意味」を読みとる際に「文脈」を考える習慣をもてば、「訳」も上達するし、作文では伝えたくなる「文脈」を持たせる工夫をすることで、単語や文法学習に意味（必要性）を感じるようになります。あとは中高間の Lexile Measure の差が問題ですね。(58)

© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

●大学
・改めて思うのは、生徒は教員の鑑、逆かもしれません。教員が幸せでないと、幸せな生徒は生まれないということです。生徒を信じる力、自分の技術を磨いていける力、明日を信じる力、変化をおそれない力…こういう力がこのcommunity によってわいてくることを感じました。(14)

【教育行政関係者】
・外国語教育の重要性が高まるなか、英語教育をとおしてどのような生徒を育成したいのかを考えながら、指導力向上の理解を進めていきたい。(27)
・グローバルな時代において様々な国の人たちと共生する力を身に付けさせたい。そのために必要なコミュニケーション力、発信力、関わる力を伸ばす授業作りを目指したい。(56)
・どのような環境であっても義務教育修了までにすべての子どもたちに基礎的な英語運用力を保証したい。そのためには教員の育成が第一であり、徹底した対面指導と英語指導マニュアルを作成し実践化させていく。(74)
・こうした会では優れた実践に光が当たる一方、「英語の授業の理解度」(図 2-1) で「ほとんどわかっていない」「30%くらいわかっている」が依然としてかなり存在しており、この対応が大きな課題である。(171)
・自明のことですが、日本の英語教育が教員にかかっていることを再認識させられました。今国で議論されていることを自身の指導におろして考えなければ。(211)
・調査の結果は、日頃感じていること、現場で感じていたことが現れていると感じた。
(解釈の仕方にもよるが)、子供の意欲をのばす指導と、英語力をつける指導は同じ方向を向いていると感じた。(213)
・全ての先生方のお話の根底にあるものは、「子どもにとってどうか」という視点で教育活動を進めていくこと。指導者にとって指導しやすい方法ではなく子どもが生き抜くための必要な力を身につけるために考えるヒントをたくさんいただいた。(249)

【研究者】
・吉田先生の言われた中学は小学校外国語活動の方法の後倒しという言葉に共感した。中高の実態をデータで知るということができるところと加藤先生・布村先生の実践が勉強になった。(85)
・英語教育を理論・実践の面から多角的に考えていくこと、それを実際のクラスの中で行うこと、また振り返りそれを少しでもよくしていくことの大切さを実感しました。特に、英語を使って学習能力がクリエーティビティや思考を高めたり、自信をつけたりというように、ことばを使って学習者を育てることの大切さを感じました。(90)
・実態調査 2014 の中では、p15 の大切なのは「英語でたくさん会話をすること」が No.1。生徒たちは世の中のこと、必要なことをちゃんとわかっている‼それに応える授業のヒントをたくさんもらいました。バッチリパクらせていただきます。Thanks a lot ‼ (206)
・1. 英語を使うことは楽しい、ということを実感し自ら積極的に使っていってほしい。
2. 活動を工夫する。「目からウロコ」のような体験ができるように。(270)
・中・高の実践が非常に具体的に紹介された今回新たな方向性でした。大学の入試改革がすすめられてゆくと共に、大学の授業自体も変わってゆかなくてはいけないと痛感させられました。(296)
・大学と高校との接合を考えるヒントを得るため参加しました。中学高校で培われた英語能力を大学課程でさらに伸ばす (つまない) 必要があると実感しました。(320)

【学生】
・私は生徒に英語好きになってもらえるような教師になりたい。学生の立場から言わせてもらうと今現場で働いている教師は、自ら考えた授業をすればそれで満足していると思う。まずは生徒の立場に立つべきだ。(15)
・現在大学院の 1 年目です。大学 1 年の時に授業でアレン先生に ARCLE を紹介していただき、それから毎年このシンポジウムに参加しています。各方面の最新の情報を一度に得ることができる大変貴重な場だと思っています。ここでの学びを研究と実践に生かしていきたいです。(16)
・私は今大学 3 年生です。高校では文法・訳読の授業ばかりを受けていました。そのため communicative な授業というものの具体的なイメージが湧かず、困るときがあります。これから教員を目指す者として、積極的に新しい技術・手法を取り入れたいです。(17)
・実態調査の結果についての討議を行ってみて、解釈の違いや教員と生徒達の間の意識の差があることを実感した。今後、研究をする際はその点も意識していきたい。(36)
・1. 自分の持っている知識を運用知に変える事。英和辞典で引いて終わりではなくて、それを使える文脈を用意するようにする。 2．教科書の内容その他へ興味を持ってもらうため、プリントを工夫する。(38)
・仲間の間違いを認め合い、コミュニケーションする楽しさを実感できる指導がしたいです。(83)
・「変化」は教員・生徒 (児童) のみにふりかかるのではなく、「親 (保護者)」にもふりかかる。自分が受けてきた教育と子ども達の教育に大きな違いがあることで、良い場合と悪い場合があるのではないだろうか。(98)
・言語の形式的な側面のみならず、そうした知識がいかに学習者に内在化され、また運用につながっていくのかということに目を向けた指導が極めて大きな重要さを帯びていると感じる。(124)
・授業以外での学習が有機的に関連し循環し合うような生徒への課題設定の重要性を痛感した。教員として社会に出るまでにそういったアイディア・スキルの持ち玉を出来る限り増やせたらと思う。(150)
・生徒のニーズに答え、機械的でなく多様な表現ができる力をみにつけさせたい。そのような指導を達成すべく、自らが学習のモデルとなるよう自身の英語技能に一切の妥協をしないことである。(153)
・現在、大学院で小学校英語について学んでおり、公立小学校でボランティアをしています。本日は、中高生を中心

© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

にデータや実践例をご紹介いただきましたが、中学・高校、そしてその先まで見据えて感じました。英語を自分の言葉として使える子どもたちを育てる手助けがしたいです。(157)
・私は教育や指導において、子供たちに人と人とのつながりを大切にしてほしいと考えています。英語という言語でのコミュニケーションの中で、子供たちに、普段と異なる一面をみせあい、より子どもの相互の交流、理解につなげたいです。そのため勉学につつしみ、教師になった際、そのようにできるようにしたいと思います。(160)
・英語を使うことによって、より生徒の生活が充実するようになることが大きな目標です。そのためには、自分の意見や考えをまとめ、発表し、批判的に考える力を授業で養いたいです。そのために、教授法などを大量に input し、少量の output を学生時代していく所存です。(176)
・英語を使える、使うというのを意識しています。だけれども、“教える”だけにかたよらない様にし、“育む”という点も大切にしています。それが“教育”になるのかと。もっとこども達には、探究心をつけたいです。その為に、自分自身の振り返りを大切にしていきたいと思います。(178)
・授業で学ぶことと入試など社会で求められる英語の間にギャップを感じる。これからは「いかに考えを英語で表現できるか」がポイントになると考える。speaking と writing の指導法について研究したい。(225)
・塾講のバイトをしているが、こぞって英作文（自由）がうまく書けていない。自分の考えを英語にするという感覚をとぎすませてあげたい。2. 簡単な英語でいいから英語で書かせる習慣をつけさせる。(226)
・①子どもが英語を好きになれるような工夫。自分で英語に関心をもって勉強出来る力。②英語嫌いを減らしたい。英語で授業をしつつ、情意フィルターを操る力を上智で研究したい。(251)
・大きな変化を迎えている英語教育の中で、将来の日本の英語教員になる学生として、国際共通語としての英語を身につけさせることのできる指導について学ぶことを努力する。(257)
・私は将来教員になり、「英語の可能性」を伝えたいと思っています。そして、自分の意見を伝えられる自立した、自尊感情の高い生徒を育てたいです。今は学生であり、現場の先生方よりも自分の時間が取れるため、ボランティア活動、学校の講座、外部講習など、いろんなものに挑戦、学び、自分の引き出しを多く作っておきたいです。(264)
・Can-do list に慣って What-to list の様な物を作り、英語を通して～がしたいと思えるような英語教育を作りたい。目標設定を明確化させることで、英語でのコミュニケーションが必要となる環境づくりが急務だと思う (265)
・今まで受けてきた学校での英語教育を振り返ると、入試に向けての学習が中心で、実践的ではなく、いざ英語を話す場面になるとだまってしまうようなものなので、両国高校のような授業が広く広まってほしいです。(266)
・それぞれが好きなことを見つけてほしい。そして好きなことでがんばってほしい。自分は残りの学生生活の中で、自分の好きなことをがんばりたい。将来胸を張って語れるように。(285)
・統計等から、英語で表現を発信することを生徒達自身も大切に思うと同時に難しくも感じているのだと知った。特に論理的に意見を主張することに関しては、自分の中高時代には、日本語ですら難しく、又、練習の機会もなかったように思う。(299)
・英語の授業を通して、使える英語力を身につけさせたいと改めて思いました。生徒がより自然に、自発的に楽しく英語を「使う」機会を授業に取り入れていきたいです。(309)
・学校生活で友だちの人間関係や授業の学びの途中で自信をなくすことがあっても自分の命を大切にする力。広い世界観を持たせるように、英語ができるだけにこだわらない。(319)

【民間企業関係者】
・生徒、学生は、実は英語をもっと使いたがっているのでは、ということを強く感じた。そのような気持ちをしぼめない、モチベーション維持できる、meaningful で interesting なプログラムを作っていきたい。その中で、CLIL,PBL など取り入れてみようと思う。(4)
・中高生に英語で発話をさせるには、文法的にストレスのない簡単な教材ですぐわかる物を使い、身近な話題を使っています。(高 2 →中 2 文法レベル。話題：スポーツ、服、音楽、自分の町など)。又、非言語要素や聞く方のマナーなども意識させています。(21)
・特に、中学高校の時期に、「英語」が日本の中で「言葉としての英語」と「教科（試験）としての英語」で分かれてしまっている現状を憂いています。英語教材制作者として、両者を融合していきたいです。(40)
・実態調査から思っていた以上に子ども達の英語を使いたいという意識が強いことが分かり、頼もしく感じた。そんな子どもたちの意欲を促進するような教材作成に励みたい（言葉は文脈の中に生を得る・文法と文法力の違い等勉強になりました。(69)
・中学から高校におけるギャップを埋めるための教材のあり方、支援方法を考え、教材に反映させる。英語嫌いを生むことを減らすためと、中高のつながりをよくするため。(71)
・本日の資料で、中高生は英語でたくさん会話できる様になりたい、英語で話せたらかっこいいと思っているにもかかわらず、英語教育ではそれがなされていない、というデータが印象的でした。自らも国際英語話者であると学生が胸を張ることのできる教育をおこなっていきたく思います。(80)
・生きた言語として、英語を使う楽しさを知ってもらいたいです。今後単語や文法を指導する際にどのような場面設定・文脈の中で学ぶことが最も良いかを日々考えていきます。(88)
・英語の授業という暗記やドリルなどが多いが言語活動についてもパターンに則ってやれるものが少ない。これからは、「考える力」をつけていかないと諸外国に立ちうちできないと思う。そのような力の育成を意識した教材づくりをしていくことが求められていると思う。(93)
・1. 現在小学校英語に関わっている。学びのある小学校英語を目指したい。
2. 小学校教員のサポート、また JTE（ALT）の質の向上のためのサポートをしていきたい。(99)
・見える学力だけでなく、見えない学力をどのように育むかも大切であると感じています。(114)

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

・英語は教科であると同時に（以上に？）“コミュニケーションの手法”であるということ。これを忘れずにいることが、子どもに英語を教えていく中で、教材を作っていく中で、大事なことであると改めて認識しました。“英語を学ぶと世界への扉が開かれる”ということを子どもに伝えていきたいです。(115)
・私は民間企業で働いており、英語教育とは関係のない立場に現在ありますが、将来的に英語教育に関わりたいと思っています。私が受けてきた英語の授業は机上の英語でしかなかったと感じているので、グローバル化する社会の中で実践的に使える英語力をこれからの子供達には身につけてもらいたいと思います。(119)
・子どもの力を点数で分別することから大きく変化していくことに向かっています。教材、指導法、学習法、成果測定法 etc. の質的転換をいかに図るか！が重要だと痛感。(145)
・塾の講師として、小、中学生に英語を教えています。「受験に必要な英語力」ではなく、「本物の英語（そして、その結果として入試でも通用する）」を生徒たちに身につけさせてあげたいと改めて思いました。(154)
・様々な状況の子どもたちがいる中でも自分が教える（自分が作った教材を使う）子どもたちの関心・英語学習経験・能力・学習動機・学習に充てる時間等を考え、一方的な指導にならないように常に気を付けていきたいです。(177)
・英語を使って何がしたいのか？を自分自身に問いかけさせる機会をたくさん作ることが大切。学ぶ目的が見えれば生徒も先生も効果的な学習に向かっていける。(183)
・指導及び教育で大切にしている事は、「聞き取り調査」に関連しますが、①学習者に寄り添う　②最善を求め続けることが重要であると改めて思いました。これらの点を踏まえて今後すべきことは学習者及び自身のために①学習者とクラス以外にもコミュニケーションをとること②クラスでの一言、一言を大切にするということです。(184)
・英語が伝わる、異文化を知る、友だちができるってすごく楽しいこと！それを生徒をおそれさせない授業、テスト評価、教材で各分野の英語教育に携わる者がいい循環を作れるようにしていけたら！と思います。Non native、アジアン English でいいじゃん、OK じゃん！って生徒が感じられる場も増やしていきたいです。(187)
・英語をなぜ学ぶのか。それは自分の可能性を広げるため。そのためには、英語だけでなく、英語で何をするスキル、そしてアウトプットする機会を提供していきたい。(188)
・英語をもっと学びたいという気持ち、英語を学ぶことで広がる世界での活躍の幅を感じてもらいたいので、そういう教材を開発します。それが日本の将来のためだからです。(197)
・Plurilingual の思想、大変勉強になりました。完璧に native のように話せなくても「伝わる英語」を子どもが使える場面・教材をもっと提供したいです。加藤京子先生の、書くことを怖がらせない CR の手法も素晴らしかったです。貴重なお話しを頂き、どうもありがとうございました。(200)
・自分は社会（世界）の中のひとりで、そこで自分と異なる他者とつながり、つくっていく力をつけてもらいたい、という､大きな目標をイメージさせた上で､「英語」はいろんな「英語」があるからつかうことを怖がらせない指導アプローチをしたい。(218)
・先生方の聞き取り調査に感動しました。留学事業に携わっており、英語が話せるようになること以上に、違う文化で自分自身に気づくこと、気持ちをストレートに表現すること、そういった人の成長を支援する仕事をしようと思います。(222)
・先行き不明な時代にこどもたちが自分の選択肢を狭めなくてよいよう、時代に適合した体力をつけられるようにしたい。(223)
・私自身が「生徒の 15 年後の姿」のかっこいい一例となっていたい。英語を学ぶ中で、私もあなたたちと同じように文法に泣かされ通じなくて悔しくて恥ずかしい思いをしたけれど、その中でも物事をこう考えてこうクリアにしてきて、今では大人になって、英語を話せるようになり、世界の一員としてこんなに素敵な体験をしていると伝えます。生徒には、「今の自分」と「英語を使って活動する大人」が地続きであることを伝えたい。(224)
・「英語でたくさん会話をすること」が英語の勉強で大切だと思っている子どもたち。英語を使いたい、実社会でいかしたい」と思う意欲に沿う教材を作りたいと思いました。(254)
・どのような言語観、人間観、言語力を最終的に持って欲しいかを考えた上で、早期英語教育に前衛的に関わり続け、周りに還元していきたい。(256)
・本日は貴重な機会をありがとうございました。田中先生の、"Authentic, Meaningful and Personal" であるべき英語指導、吉田先生の "Can-do student" は表現は多様にある、という言葉が特に印象に残りました。教材 / アセスメント開発者として、生徒にとって意味のある、そして使える英語をはかれる教材 / アセスメントを開発していきたいと思いました。ありがとうございました。(260)
・Authentic な情状と場面、Personal な感情にヒビく、届く表現で、Meaningful な感動をひとりひとりに届けられる。指導者として人生を楽しんでいる。今をイキイキと生きている姿勢を目指したいとこの会に参加して強く感じました。(262)
・子どもたちは英語学習の目標を定めて学習してもらいたいと思います。（目標が明確ならがんばれるので。）英語学習の達成目標が思考力や意見の表明の力なのだとするとそれはもう英語の力とは少しちがってくるのではないかと考え始めました。その点もう少しつきつめていきたいです。(268)
・「英語を話せたらかっこいい」が、「英語が話せてあたりまえ」へ。英語が話せない、英語に対する劣等感があるからこのような言葉が出てくるのだと思います。英語教育に携わっている企業人として「国際共通語としての英語」を促進できるよう努めたいです。Can-do/ タスクベースを意識して。(271)
・入試対策問題の作成に携わっていますが、自由英作文中心に、間違いを指摘するのではなく書いた内容をきちんと見ていくことが必要だと感じました。(276)
・文脈の中で、表現・文法を自然に学ぶメソッドとして多読に関心があります。その点で、田中先生のお話、根岸先生の仮説も興味深かったですが、生徒の実態調査を見ると、子どもたちの意欲を大事にするなら「読む」よりも「話す」活動のほうに未来があるのかな…という気もしてきました。(277)

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

・質的研究の共有から先生方がぶれない軸を持ちながらも、子どもたちにも自分自身にも社会の変化にも寛容に柔軟に対応されていることに感銘しました。自分もそうあれるように軸をもう1度見直したいと思います。(279)
・悩みながらも生徒を愛する先生方の姿はとてもすばらしかったです。(美しかったです！)(283)
・多くの先生に選んでもらえる教材というだけでなくて、子どもにとって良い必要な力がつけられるものづくりとする。(両者が一致していくようなフォローも…)(284)
・自分事として学べるように、自分と身近な社会に関係する文脈の中で、学べる環境を作っていきたい。(286)
・眼からウロコの内容で有意義、私自身、米国留学(2年)、ロンドン勤務(8年)の経験があり、子ども達の英語コミュニケーション力にとても関心がある。私は、ロンドンで営業をやったことがあり、イギリス人の助動詞、仮定法を使う言葉のニュアンスに驚き、そこを乗り越えたことが成果につながった。田中先生の「文法力」の話は我が意をえたりだった。(293)
・英語に限らず“意欲”の低下が日本教育課題の1つと思います。吉田先生「non-nativeの英語でok」、加藤先生「生徒を怖がらせない」やる気を高め、力をつけるヒントを得たように思いました。(295)
・画一的でなく、フレキシブルに子供一人ひとりがイキイキと英語に親しみ、自ら成長実感できる教育プログラムを開発、先生を支援したい。(302)
・「グローバル人材」という言葉が抽象的に語られがちですが、“生きた英語”を提供し、能動的に発信できるようなお手伝いができるようこれからも注力していきたいです。(315)

【その他】
・1. クラスの子たちと発想を広げながら一緒に創るlessonを心掛けている。3～4回／月の中でひとつのテーマをwords, expressionを導入するActivity　～最後にまとめとして全員でshareできる発表(playや絵)など。この最後に向けて子供達と楽しむことを大切にしている。
2. 授業デザインの工夫と実践。シンプルな英語で教える工夫。ノンバーバルコミュニケーション力、絵を描く事、歌などの練習も！(1)
・予備校で大学入試対策のessay writingを指導しており、学生の思考力と「書く」という形式の発信力養成に重点を置いています。現在は添削と対話という1対1の指導のみなので、学生同士で議論させる手法を取り入れてみたいと思います。(11)
・この3月で38年の教員生活にピリオドをうちました。この4月から再任用という立場で教壇に毎日立っています。ここで申し上げられることは生徒さん一人一人が例外なく可愛く思っていることです。(12)
・私は英語教育とは無縁の分野にいますが、つい先月英語教育の道を志しました。私が今まで英語を通じて得た喜びとコミュニケーションの素晴らしさを伝えていきたいと思いました。(34)
・自分の思いや気持ちをのせて、表現・伝えられる力をつけてほしい(英語を使って)。FormよりMeaning!!!な活動をする。(79)
・グループで初対面の方、立場の全く違う方と意見交換ができた事がとても新鮮に感じられました。英語が苦手と感じる生徒へのアプローチ等、楽しい場面設定など事前準備を大切にしていきたいと思いました。(82)
・「学ぶことの楽しさを伝えられる教員になりたい」という初心を忘れず、生徒に寄り添いながら、実践に努めていきたいと思います。(106)
・(私は英語教育とは全く関係のない銀行員なのですが…とても興味があるので参加しました)教職を取り、最後の最後まで教師と民間会社で悩みましたが、今働いて改めて日本の英語教育の大切さ、そして英語で苦しむ社員を見て「使える英語」の重要性を感じています。“先を見越した最善の努力”まさにこれからのグローバル化する社会において大切なのでは？だからこそ英語の先生は未来のカギを握るキラキラした目の生徒に対してteacherの役目だけでなく、Pioneer(新たな世界を開拓)、Observer(見守り)、Supporter(助ける)の存在でなくてはならないのだと感じました！21世紀、もっと世界で輝く日本人を増やして欲しい！！(118)
・英文を理解させることだけに重点をおかない。そこから考えたことや意見、感想を言えるような表現活動を授業に取り入れる。(127)
・英語らしい(正確な)音声イメージを身につけることが全ての基礎にあると思います。その後に音と文字のつながりをつくりあげる。それがないとリスニングできないし、やる気も(始めはあっても)持続しないでしょう。(152)
・今日印象に残ったのは、生徒が自分の興味から出てきた事がら。自分の行動(発表など)に直結する事がらに対して自発的に学習するという点です。これは成績とは無関係なようですね！(203)
・幼稚園～小学生に英語を教えています。今日のシンポジウムで、改めて、自分を振り返り、新しくチャレンジしていきたいと思いました。こんなに一所懸命、みなさんが、子ども達の授業を考えているのですから、子ども達の未来は明るいです。(234)
・1.「使える英語」力をこども達につけてもらいたい。
2. ①「音声(発音)⇒文字」の流れの重視。②speaking/listening/writing/readingのバランスが取れた指導を心掛けたい。(273)
・子どもの英語に対する学習観が変化し、“使うこと”を意識しはじめているというデータから感じた。先生の英語指導はどうなのか？先生に対する発信をしていきたいと思った。(300)
・1. 創造力・批判力・他者と協力する力を身につけてもらいたい。
2. 1が求められるような発問を投げかけ、発表する機会を与える。(307)

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

■ ARCLE 理事・研究員からのコメント：シンポジウムを終えて

●上智大学　吉田　研作

今回のシンポジウムも例年同様、非常に具体的なテーマについて、調査結果を基に議論が進められたが、今回は、参加者全員が参加する形式が取られ、より充実したシンポジウムになったと思う。子どもたちの英語の学習の実態、彼らが思っていることが色々な形で明らかになり、布村、加藤両先生による具体的な教え方の提示など、非常に有益な会になった。また、リーフの形で一人一人の参加者が自分の考えや気持ちを表す機会があったことも、非常に良かった。ただ、午前午後と、内容的に非常に濃く、一回のシンポジウムで扱うには情報量が多すぎたかもしれない。

日本の英語教育が大きく変わろうとしている現在、今回のように、単に教育現場だけでなく、教育行政、研究者、学生、そして民間の教育機関等、英語教育にさまざまな立場から関わっている人がそれぞれの立場から発言し、互いに意見を共有できたことは非常に良かったし、このような機会は、今後もっともっと必要になるだろう。

●慶應義塾大学　田中　茂範

文法指導では「わかる、使える」が鍵である。しかし、今回の「中高生の英語学習に関する実態調査2014」では、「文法が難しい」という生徒の声が上位にあり、そのことが英語学習を難しくしているという側面が明らかになった。そこで、英語教育改革の１つは、文法指導の在り方を変えることであると確信した。その際の決め手は、「文法知識」から「文法力」に視点を移すことである。言語は自由表現と慣用表現を両輪とする。自由表現のよりどころになるのが文法力である。「文法は知っていても使えない」という現象は、文法知識は文法力を保証しないということを意味する。結論をいうと、教師にとって必要なのは、英文法の指導を行う際に、「文法力を養成する」ということを目的に掲げて、説明とエクササイズを実践することである。そのためには表現のための文法、すなわち「表現英文法」という視点が不可欠となる。表現者が状況を表現する際に文法（例 . 時制、態）はどういう役割を果たすかという捉え方である。表現者、状況、表現の関係の中に文法を位置づけるということである。

●東京外国語大学　根岸　雅史

「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」では、中学前半（中１の前半から中２の前半）と高校１年の前半に英語が苦手となることが分かった。

中学前半は、英語の基礎となる文法・文型などの学習項目が数多く出てくるために、これらが学習上の障害となっている可能性がある。この段階で「落ちこぼれ」を出さないためにも、どれだけ丁寧にやってもやりすぎということはない。

これに対して、高校入学段階でこれだけ多くの英語嫌いを出している認識は、高校教師にはあまりなかったのではないか。私が行った教科書の難易度調査では、中学から高校になる段階で教科書のテキスト難易度が急激に上昇している。ある高校の例では、生徒が教科書のテキストを自力で読んだ場合、３割程度しか理解できないと推定される。高校では、大学入試を意識して教科書選択がなされ、生徒の英語力の実態をあまり考慮していない可能性がある。だとすれば、高校入学と同時に英語嫌いをつくらないためにも、教科書のありさまは再考されてもいいのではないか。

© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

●青山学院大学　アレン玉井　光江

今回のシンポジウムもたくさんのプログラムが準備され、大変有意義なものでした。その中に中高生の英語学習に関する実態調査についての報告がありました。発表では、重要な項目について酒井先生から説明があり、その後先生より調査結果について質問が出されました。参加者全員がグループで話し合い、その後、グループ討議の結果が報告され、最後に吉田先生、根岸先生がコメントされました。中学や高校の先生、院生、学生、教育関係者などさまざまな方々が真剣にかつ、楽しく話されていた様子がとても印象的でした。また、グループの発表を聞いた後にフロアから自然に大きな拍手が寄せられましたが、シンポジウムに参加した全ての人が１つになった感じがして、素晴らしいと思いました。会を重ねるごとに「みんなでつくるシンポジウム」という思いが強くなります。また、最後に谷山所長から今後の世界の動向が提示されました。激しく変化する世界へ向けて羽ばたく人材育成を担う私たち英語教育に従事する者の責任を強く感じました。

●関東学院大学　金森　強

「気づきの木」に書き込まれた参加者の想いを感じることができたことが、今回、シンポジウムに参加した一番の収穫であった。英語教育の抱える課題についていろいろな角度から考えることができたからである。

光り輝く巨大な氷山も、その下にある土台部分が広がっていなければ簡単に崩れ落ちてしまう。英語教育の改革が進んでいるが、その成功のためには、母語教育を含めた小学校から大学までの多言語教育の在り方をしっかりと議論しながら進めることを忘れてはならない。すでに、私立中学校の入試に英語を導入する学校が増えてきていると言う。音声面を軽んじたペーパ―テストだけの実施で終わっているとしたら、小学校段階の英語教育を歪めかねない由々しき問題である。

ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんのスピーチを聞くたびに教育の重要性を痛感する。グローカル時代に生きる児童・生徒の才能を引き出し、豊かな社会を形成していけるように導くためには、われわれ教育に携わる人間がそれぞれの立場で課せられた責任をしっかりと果たさなければならないのである。外国語教育においては、外国語を学ぶことを通してどのような人間を育てるのかを考えることが大切である。人との関わりを大切にした「言葉の教育」としての外国語教育が広がることを期待したい。

●東海大学　長沼　君主

CEFR の教師版の言語教師能力参照枠としてヨーロッパでは The European Profiling Grid が最近開発されました。CEFR と同様に６つのレベルに分かれており、いわゆる教授力に関わる部分だけでなく、言語能力から異文化間コミュニケーション力、デジタルメディアへのリテラシーなども含まれているのですが、自律的学習者を育てるには、教師自らが自律的教師となり、実践を内省する価値を伝えていくことが大切で、その意味でも振り返りリーフの活動は意義深いです。グリッドの１つの項目の Interaction, management and monitoring といった教室運営に関わる部分の記述で、A2 に相当するレベルでは指示を明確に出し、活動を回せるようになる段階なのに対して、自立的段階といえる B1 になるとフィードバックやモニタリングができるようになることが求められています。B2 ではさらにフィードバックを引き出せることもあり、C1 になるとそれを活動設計に生かしていけるようになります。生徒を見取るだけでなく、引き出していく仕掛けをつくることで、内省をより豊かにしていけたらと思います。

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

MEMO

ARCLE/ アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.

ARCLE® 概 要

研究員一覧(五十音順)

研究理事　アレン玉井光江(青山学院大学教授)
金森強(関東学院大学教授)
田中茂範(慶應義塾大学教授)
根岸雅史(東京外国語大学教授)
吉田研作(上智大学教授)＊研究理事代表

研究員　長沼君主(東海大学准教授)
加藤由美子(ベネッセ教育総合研究所)
福本優美子(ベネッセ教育総合研究所)
横井理絵(ベネッセ教育総合研究所)

正式名称　Action Research Center for Language Education(ARCLE/アークル)
＊ARCLEはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です

事務局　〒206-0033　東京都多摩市落合 1-34
ベネッセ教育総合研究所 内

ARCLE Webサイトのご案内

英語教育　アークル　http://www.arcle.jp/

ARCLEでの研究活動(イベント情報含む)・コラム・刊行物などを定期的に発信しています。
本冊子、研究紀要もダウンロードできます。

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム報告書

発行日　2015年3月20日
編集・発行　Action Research Center for Language Education(ARCLE/アークル)
〒206-0033　東京都多摩市落合1-34　ベネッセ教育総合研究所 内
http://www.arcle.jp/

ARCLE/アークルはベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です　http://www.arcle.jp/
© Benesse Corporation 2015. All Rights Reserved.